

ISSN 0286-2549

# 関西学院考古

No.11

2022.12

関西学院大学考古学研究会



## 目次

関学考古研の部室移転に伴う所蔵資料保存と報告

1. 関学考古研所蔵遺物の移管及び整理の経緯----- 1

・ · · · · 金岡希世乃

2. 各自治体の移管遺物に関する遺跡概要と目録

・ · · · · 関西学院大学考古学研究会

・ 西宮市----- 4

・ 姫路市----- 8

・ 川西市----- 10

・ 宝塚市----- 12

・ 神戸市----- 16

3. 関西学院大学考古学研究会部室残置の遺物類について-- 18

・ · · · · 藤原光平

4. 関西学院大学考古学研究会の歴史----- 39

・ · · · · 高田祐一・金岡希世乃

関西学院大学構内古墳の3次元計測----- 53

・ · · · · 高田祐一

『関西学院考古』が私にはある ----- 60

・ · · · · 坂井秀弥

『関西学院考古』2~10号の目次 ----- 64

・ · · · · 関西学院大学考古学研究会

図版 ----- 65

抄録 ----- 101

# 関学考古研の部室移転に伴う所蔵資料保存と報告

## 1. 関学考古研所有遺物の移管及び整理の経緯

金岡希世乃

2016年に関西学院大学文学部棟内にあった考古学研究会の部室が、文学部の通達により急速旧学生会館3階に移動することになり、部室の面積は縮小となった。そのため、今まで部室で保管していた遺物の場所を確保することが困難となった。また、遺物の保管技術が当時の部員になかったので、出土地が確実に分かる遺物のみを各自治体に移管することが決まった。移管の際には、コンテナや遺物袋を替えるなどの整理作業も実施した。

2016年1月、西宮市・姫路市に遺物移管

2016年2月、神戸市・宝塚市・川西市に遺物移管

2016年6月、部室移転

出土地が確実な遺物を各自治体に移管したが、関学構内古墳関係は部室での保管としていた。しかしながら、部室は遺物を保管するには環境が劣悪であり、適切な環境ではなかったため、当時の考古研部員のなかで関学構内古墳関係遺物も西宮市に移管るべきという意見が出た。そこで、当時関学大学院の集中講義に講師として来られていた関学考古研のOBである坂井秀弥先生に相談し、岡野氏（前川西市教育委員会）、松林氏（神戸市教育委員会）、高田氏（奈良文化財研究所）、藤原氏（加東市教育委員会）らOBの協力を得て遺物の整理及び西宮市への再移管、移管遺物の目録を作成する作業を開始した。



2019年5月 移転先の旧学生会館の部室での整理作業風景

2019年5月、遺物整理開始

2019年8月10日、西宮市に遺物移管2回目

2021年12月16日、川西市文化財資料館にて目録作成・写真撮影



2021年12月22日、西宮市立郷土資料館にて目録作成・写真撮影



2022年1月12日、姫路市埋蔵文化財センターにて目録作成・写真撮影



2022年1月13日、宝塚市立小浜宿資料館にて資料整理・目録作成・写真撮影



2022年1月20日、神戸市埋蔵文化財センターにて目録作成・写真撮影



## 2. 各自治体への移管遺物に関する遺跡概要と目録

関西学院大学考古学研究会

### ・西宮市（表1）

#### ○関西学院構内古墳

6、7世紀の古墳時代後期に造られた。西宮市指定文化財。横穴式石室の円墳で石材は仁川渓谷の花崗岩で、石室はもち送りの技法が使われている。武藤誠氏による1935年と1959年の2回の調査で金環など装飾品、武具、馬具、須恵器などが発掘された。また、1969年の関学考古研による調査でも土器片が見つかっている。

- ・武藤誠 1980『母校通信』第64号
- ・長尾文雄 1991.1「古墳」「関西学院広報」第143号
- ・関西学院大学考古学研究会 1975『関西学院考古』第2号
- ・関西学院大学考古学研究会 1976『関西学院考古』第3号

#### ○青石古墳

7世紀に造られた円墳。直径約13mで、内部は横穴式石室が築かれており石室は全長7.16m、幅1.4mを、中央部分の幅が広い胴ぼりである。谷地形の奥、南西に傾斜する山地斜面で標高約250mに位置する。1967年3月に関学考古研が行った発掘調査で須恵器や土師器、鉄釘が出土した。

- ・青石古墳（nishinomiya-yamaguchi.jp）（2022年1月24日閲覧）
- ・西宮市教育委員会 1974『青石古墳発掘調査報告書』文化財資料第8号

#### ○仁川五ヶ山

弥生時代中期後半の高地性集落の遺跡。1958年に武藤誠氏が、1970年・1973年に関学考古研が調査した計3回の調査により、遺構は住居跡7基、溝状遺構1基、遺物は甕形土器、壺形土器、無頸壺形土器、高杯形土器、器台形土器、土器の底部などが出土している。また、1969年に弥生土器、1996年に石棺材も出土している。

- ・西宮市教育委員会 1975『仁川五ヶ山弥生遺跡-No.4地点の調査報告』西宮市文化財資料第14号
- ・西宮市教育委員会 1976『仁川五ヶ山弥生遺跡-No.5地点の調査記録』西宮市文化財資料第16号

#### ○甲風園

西宮市甲風園1丁目に位置する弥生時代前期の遺跡。発見の過程について詳細は不明であるが、1966年8月に、増田氏敷地内から弥生時代前期・中期の甕の口縁部、壺口縁部、壺の底部、櫃底部などの細片が十数点出土している。これらの出土物は考古学研究会に移管された。

- ・折井千枝子、坂井秀弥 1978『西宮市甲風園採集の弥生式土器』『関西学院考古』第4号、関西学院大学考古学研究会

表 1 西宮市の移管遺物目録

コレクション番号	遺跡名	地点・地区	年月日	内容	備考
KCG001	池上ヶ原		1950/02/26	入骨、陶片 鉢底、頭頂、土師器片	
KCG002	筒字町内古墳		1969/07/14	土器片	
KCG002	筒字町内古墳		1969/07/14	直筒口、土器片	
KCG003	首古占町		1968/11/17	直筒口、土器片	
KCG004	山田園大東町		1969/07/19	直筒口、土器片	
KCG004	「川井」ヶ山		1968/10/27	直筒口、外生片	
KCG004	不動園二番町		1968/10/20	直筒口、外生片	
KCG004	山口名東		1968/12/25	直筒口、外生片	
KCG004	門戸町		1968/11/24	直筒口、外生片	
KCG004	水田中 公園北		1968/12/26	直筒口、外生片	
KCG004	名東 水田中		1964/12/23	直筒口、外生片	
KCG004	山口町 水田中		1968/12/25	直筒口、外生片	
KCG004	名東 西正ヶ谷		1968/12/26	直筒口、外生片	
KCG005	山園園地	山園園1丁目11	1950/07/26	直筒口、木底、外生、直筒	明田氏口出資料。R.1, R.2 R.1 ~ 9
KCG006	袖ヶ原口苗跡(左)		1958/07/07	直筒口、木底、外生片	
KCG007	「川井」ヶ山	2号B通区	1958/07/07	直筒口、木底、外生片	★馬具?
KCG007	「川井」ヶ山	主室入り口	1970/10/29	直筒口、木底、外生片	
KCG008	「川井」ヶ山		1958/07/26	直筒口、木底、外生片	
KCG008	「川井」ヶ山		1958/07/26	直筒口、木底、外生片	
KCG008	「川井」ヶ山		1958/07/26	直筒口、木底、外生片	
KCG008	「川井」ヶ山		1958/07/26	直筒口、木底、外生片	
KCG008	「川井」ヶ山		1958/07/26	直筒口、木底、外生片	
KCG008	「川井」ヶ山		1958/07/26	直筒口、木底、外生片	
KCG008	「川井」ヶ山		1958/07/26	直筒口、木底、外生片	
KCG008	「川井」ヶ山		1958/07/26	直筒口、木底、外生片	
KCG008	「川井」ヶ山		1958/07/26	直筒口、木底、外生片	
KCG008	「川井」ヶ山		1958/07/26	直筒口、木底、外生片	
KCG008	「川井」ヶ山		1958/07/26	直筒口、木底、外生片	
KCG008	「川井」ヶ山		1958/07/26	直筒口、木底、外生片	
KCG008	「川井」ヶ山		1958/07/26	直筒口、木底、外生片	
KCG008	「川井」ヶ山		1958/07/26	直筒口、木底、外生片	
KCG008	「川井」ヶ山		1958/07/26	直筒口、木底、外生片	
KCG008	「川井」ヶ山		1958/07/26	直筒口、木底、外生片	
KCG008	「川井」ヶ山		1958/07/26	直筒口、木底、外生片	
KCG009	「川井」ヶ山	B1	1970/10/29	直筒口、外生片	
KCG009	「川井」ヶ山	E3	1970/10/29	直筒口、外生片	
KCG009	「川井」ヶ山	B4	1970/10/29	直筒口、外生片	
KCG009	「川井」ヶ山	C1	1970/10/29	直筒口、外生片	
KCG010	「川井」ヶ山	A	1970/10/29	直筒口、外生片	
KCG010	「川井」ヶ山	C	1970/10/29	直筒口、外生片	
KCG010	「川井」ヶ山	E	1970/10/29	直筒口、外生片	
KCG010	「川井」ヶ山	E.3.トレ	1970/10/29	直筒口、外生片	
KCG010	「川井」ヶ山	NG.1D2	1970/10/29	直筒口、外生片	
KCG10	出土(地)			直筒口、外生片	コシテナ NO.7(山)



KCG15	ヒコ山 C	A1.12回	195807/06
KCG16	二川ヒコ山	A1.トレンチ	197010/28 ~ 197011/08
	二川ヒコ山	A2.トレンチ	197010/28
KCG17	二川ヒコ山	A3.トレンチ	197010/28 ~ 197011/03
KCG18	二川ヒコ山	B.トレンチ	197010/21, 197010/20
KCG19	二川ヒコ山	B.トレンチ	197010/28, 197011/02, 197011/04
KCG20	二川ヒコ山	B-W.トレンチ	197010/21 ~ 197011/04
KCG20	二川ヒコ山	C1.トレンチ	197010/29 ~ 197011/08
KCG20	二川ヒコ山	C2.トレンチ	197010/29 ~ 197011/030
KCG20	二川ヒコ山	C.E.	197010/21
KCG20	二川ヒコ山	C.EH	197010/31
KCG20	二川ヒコ山	C.W	197010/03 ~ 197010/09
KCG20	二川ヒコ山	C.WH	197010/29, 197011/01
KCG21	二川ヒコ山	D.トレンチ	197010/21
KCG21	二川ヒコ山	E1.トレンチ	197010/29 ~ 197011/07
KCG21	二川ヒコ山	E2.トレンチ	197010/23 ~ 197010/30
KCG21	二川ヒコ山	E3.トレンチ	197010/28
KCG22	二川ヒコ山	F.トレンチ	197010/24 ~ 197011/03
KCG23	二川ヒコ山	G.トレンチ	197011/25, 197011/28
KCG24	二川ヒコ山	H.トレンチ	197011/23 ~ 197011/24
KCG24	二川ヒコ山	I.トレンチ	197011/04
KCG25	二川ヒコ山	Z.トレンチ	197011/22 ~ 197011/24
KCG26	二川ヒコ山	S.トレンチ	197011/02 ~ 197011/22
KCG26	二川ヒコ山	S2.トレンチ	197011/03
KCG26	二川ヒコ山	重断面	197010/22 ~ 197011/07
KCG28	二川ヒコ山	二川ヒコ山	197010/24 ~ 197011/04
KCG29	出土地不規		10点。当時のダンボーラジ鏡 (Nel) ~ 135S ヒコ山
KCG30	二川ヒコ山		135S ヒコ山
KCG30	二川ヒコ山	E1	135S ヒコ山
KCG30	二川ヒコ山	E2	135S ヒコ山
KCG30	二川ヒコ山	E3	135S ヒコ山
KCG30	二川ヒコ山		1967/07/24
KCG31	出土地不規		135S ヒコ山
KCG32	二川ヒコ山		135S ヒコ山
KCG33	出土地不規、二川ヒコ山		135S ヒコ山
KCG34	二川ヒコ山		135S ヒコ山
KCG35	二川ヒコ山	石室内海船上面、二川ヒコ山 I 与館東 方丘陵	00000008/28
KCG36	出土地不規		135S ヒコ山
KCG37	二川ヒコ山		135S ヒコ山
KCG38	二川ヒコ山		135S ヒコ山

・姫路市（表2）

○大山遺跡

男鹿島の西北に位置し標高 200m にある遺跡。数カ所で弥生時代の壺棺が発見されている生活遺跡である。1953年7月22日石野博信氏らが発掘調査を行っている。

- ・家島群島総合学術調査団 1962『家島群島』神戸新聞社

○チンカンドー古墳

石棺を伴う横穴式古墳の廃址。横穴式石室で天井石を失っている。玄室で蓋の長さ 150 センチ、幅 76 センチ、高さ 26 センチの龍山石製のくり貫き式家形石棺 1 基が発見された。1959 年 7 月 19 ~ 22 日に武藤誠氏らが発掘調査を行った。床下 30 センチから須恵器（7 世紀）や土師器が発掘された。

- ・姫路市チンカンドー古墳 (<https://www.city.himeji.lg.jp/kanko/0000001974.html>) (2022 年 1 月 24 日閲覧)

- ・神戸新聞社会部 1961『祖先のあしあと』IV 神戸新聞社

- ・家島群島総合学術調査団 1962『家島群島』神戸新聞社

○ヒシノタイ古墳

男鹿島のヒシの浜タイに残る横穴式石室古墳。古墳や土器の形式から古墳時代後期のものと推測される。1959 年に武藤誠氏らがチンカンドー、大山神社遺跡とともに発掘調査を行った。家島群島全域において横穴式石室の旧態を残している唯一の遺構である。

- ・神戸新聞社会部 1961『祖先のあしあと』IV 神戸新聞社

- ・家島群島総合学術調査団 1962『家島群島』神戸新聞社

○真浦遺跡

家島港の北の一角の浜にある遺跡。2種の師楽式土器・土師器・須恵器・土錘が見つかっている。

- ・家島群島総合学術調査団 1962『家島群島』神戸新聞社

○山崎山古墳 1号墳

市立姫路高等学校敷地の北側、八丈岩山の麓に造られた横穴式石室墳群で 7 基あるうちの 1 つ。1 号墳からは鉄刀、鉄鎌、馬具類、首飾り、鍔などが発見された。関学考古研の遺物より、1964 年の 8 月 19 日から 21 日まで調査が行われていることがわかった。

- ・姫路市山崎山古墳出土遺物 (<https://www.city.himeji.lg.jp/kanko/0000001998.html>) (2022 年 1 月 24 日閲覧)

- ・松本正信 2010『山崎山古墳群』『姫路市史』第 7 卷下 考古資料編 姫路市

表2 姫路市の移管遺物目録

姫路市コレクション番号	遺跡名	年月日	内容	備考
1	大山遺跡	—	土器	「家島群島」 挿載遺物
2	大山遺跡、チンカンドー古墳	—	石製品、石器 (石包丁)	「家島群島」 挿載遺物
3	ヒシノタイ古墳	—	土器	「家島群島」 挿載遺物
4	チンカンドー古墳	—	土器	
5	大山遺跡	—	土器	
6	大山遺跡、真浦遺跡	—	土器、石製品	
7	大山遺跡	—	土器、石製品	
8	ヒシノタイ古墳、出土地不明	—	土器、石器	
9	山崎山古墳 (1号墳)、出土地不明	1964年8月19日～21日	須恵器 (高环)	
—	チンカンドー古墳	—	土器 (土師器・須恵器)	「家島群島」 挿載遺物
—	チンカンドー古墳	—	土器 (土師器・須恵器)	「家島群島」 挿載遺物
図面	大山遺跡、チンカンドー古墳	—	図面 50点	

## ・川西市（表3）

### ○加茂遺跡

兵庫県の南東部、川西市の南部に位置する遺跡である。旧石器・縄文時代から弥生・古墳・奈良・平安時代まで継続する。なかでも弥生時代中期は近畿地方を代表する大規模集落となる。1915年の遺跡発見以来多量の弥生土器・石器の散布地として著名となつたが、発掘調査は1952年から1954年の関西大学と関西学院大学による合同調査に始まる。以後市教委による発掘調査で遺跡の実態が明らかになった。2000年国史跡に指定される。

・末永雅夫 1968『揖津加茂』関西大学文学部考古学研究第3冊 関西大学

・川西市教育委員会 2000『史跡加茂遺跡』

・岡野慶隆 2006『日本の遺跡8 加茂遺跡』同成社

### ○寺畠遺跡

石野博信氏が川西市在住時代に弥生土器を採集したという伝聞をもとに設定された遺跡である。長らく実態は不明であったが、今回の移管遺物中に1960・61年寺畠で採集された当該遺物が確認され、出土地点の特定（寺畠1丁目56番付近）と所属年代（弥生中・後期）を知ることができた。

・岡野慶隆 2018「川西市寺畠採集の土器」（兵庫考古研究会『ひょうご考古』第13号）

表3 川西市の移管遺物目録

川西市ネーミング NO	遺跡名	年月日	内容	備考
K-KG-1	加茂遺跡		学生土器片	おさわり土器(使用)(川西市)
K-KG-2	加茂遺跡		学生土器片	
K-KG-3	加茂遺跡		学生土器片	
K-KG-4	加茂遺跡		学生土器片	
K-KG-5	加茂遺跡		学生土器片	
K-KG-6	加茂遺跡		学生土器片	
K-KG-7	加茂遺跡		銅器	
K-KG-8	加茂遺跡		土鍬	
K-KG-9	加茂遺跡		学生土器片	
K-KG-10	加茂遺跡		石 学生土器底部	
K-KG-11	加茂遺跡		須恵器片	
K-KG-12	加茂遺跡		学生土器片	
K-KG-13	加茂遺跡	S34.10.6	須恵器片 土器片・木片	現物ヒラベル不一致。実際は須恵器片 <sup>17</sup> 不明遺物。「剥削D」と書かれた須恵器片 <sup>17</sup>
K-KG-14	加茂遺跡		石匁	おさわり石器(使用)(川西市)※レキと思われる袋含む
K-KG-101	加茂遺跡		石匁	石斂・石筒含む
K-KG-102	加茂遺跡		石鍬	
K-KG-103	加茂遺跡	S34.10.6	石鍬	
K-KG-104	加茂遺跡	S34.10.6	石鍬	
K-KG-105	加茂遺跡	S34.10.6	石鍬	
K-KG-106	加茂遺跡	S34.10.6	石鍬	
K-KG-107	加茂遺跡	S34.10.6	石鍬	
K-KG-108	加茂遺跡	S34.10.6	石鍬	
K-KG-109	加茂遺跡	S34.10.6	石鍬	
K-KG-110	加茂遺跡	S34.10.6	石鍬	
K-KG-111	加茂遺跡	S34.10.6	石鍬	

・宝塚市（表5）

○長尾山丘陵の古墳群

大阪平野西北部の山腹・山麓に数多くつくられた後期古墳群のうち、西摂平野北部に位置する古墳群を指す。『宝塚の埋蔵文化財』（1970）時点で、長尾山古墳群の構成は、消滅墳を含め総数151基であり、2単独墳と8支群分けられた。1970年、1980年、1991年の計3回名称変更がなされている（表4）。

・宝塚市教育委員会 1970『宝塚の埋蔵文化財』宝塚市文化財調査報告第1集

・宝塚市教育委員会 1975『宝塚市雲雀山古墳群—東尾根A支群・西尾根B支群の調査一』宝塚市文化財調査報告第6集

・宝塚市教育委員会 1980『長尾山の古墳群調査集報』宝塚市文化財調査報告第14集

・宝塚市教育委員会 1991『雲雀山西尾根古墳群 発掘調査報告書—B支群の調査一』宝塚市文化財調査報告第26集

○雲雀山西尾根古墳群

兵庫県宝塚市平井に所在する古墳群であり、北から順にA・B・Cの各支群に分けられる。A支群は市街化調整区域にあり、C支群は未調査のまま消滅したとされている。B支群にある1・2号墳（2基）は1972年に発掘調査され、1988年に宝塚市教育委員会によって行われた発掘調査では、それらの古墳よりも西に位置する6基の古墳が調査された。この地域の古墳群は6世紀型と7世紀型の古墳が混在しており、古墳群の東南には7世紀頃の須恵器生産が行われた場所とされている平井古窯跡が所在している。

・宝塚市教育委員会 1991『雲雀山西尾根古墳群 発掘調査報告書—B支群の調査一』宝塚市文化財調査報告第26集

○雲雀山東尾根古墳群

大阪平野の西北にあたる長尾山丘陵にある群集墳の一つである。A・B・Cの3支群（A支群は上下に分かれている）が同一尾根上の標高50m～150mに分布する。A支群は上下7基ずつあり、いずれも7世紀型の古墳とされている。B支群は17基の小型無袖式石室と6基の箱式石室からなる。C支群は6世紀型古墳8基で構成されている。A支群の上、B・C支群は全て消滅している。

1959年に石野博信氏により調査され、1972年には宝塚市教育委員会が主体で調査された。

・宝塚市教育委員会 1975『宝塚市雲雀山古墳群—東尾根A支群・西尾根B支群の調査一』宝塚市文化財調査報告第6集

・宝塚市教育委員会 1980『長尾山の古墳群調査集報—雲雀山東尾根古墳群C支群2号墳・雲雀丘古墳

○雲雀ヶ丘古墳群

長尾山古墳群の最も東に位置し、A・B・C南・C北の4支群から構成される。A支群は消滅し、B支群は1基、C北支群は3基、C南支群は2基確認されている。特にC南支群は1954年に武藤誠氏・村上行弘氏によって調査された。1958年には関学考古研で雲雀ヶ丘古墳出土須恵器の復元を行なっている。

- ・宝塚市史編集専門委員 1977『宝塚市史』第4巻

○中筋山手古墳群・中筋山手東古墳群

長尾山古墳群のうち、最も西に位置する古墳群である。阪急山、稻荷神社、上中筋（庚申塚）の3支群を総括した名称である（表4）。12基で構成されており、そのうち天神川に面した尾根裾にある4基を中筋山手東支群と称される。武藤誠氏によって1976年には東支群2号墳、1978年に5号墳が調査された。関学考古研では1959年には古墳群のパトロールを行なっており、また1975～1977年にかけては踏査及び古墳の測量調査を行なっている。

- ・宝塚市教育委員会 1980『長尾山の古墳群調査集報—雲雀山東尾根古墳群C支群2号墳・雲雀丘古墳群B支群1号墳・中筋山手古墳群5号墳一』宝塚市文化財調査報告第14集
- ・関西学院大学考古学研究会 1978『長尾山の古墳群(I)－中筋山手古墳群－』『関西学院考古』第4号

○勅使川 窯跡

現在の宝塚市中山台1丁目にあった須恵器の窯跡である。窯は勅使川の谷に面した丘陵の東向き斜面を利用して半地下式で造られている。7世紀後半から8世紀の窯とされる。1960年5月に石野博信氏らの踏査及び試掘で、土器片と小型銅鏡を採取されたことにより存在が推定されることとなった。その後1966年に兵庫県教育委員会及び宝塚市教育委員会が発掘調査を実施し、その後埋め戻された。

- ・宝塚市教育委員会 1970『宝塚の埋蔵文化財』宝塚市文化財調査報告第1集
- ・宝塚市史編集専門委員 1977『宝塚市史』第4巻

○安倉

神獸鏡が出土した安倉高塚古墳がある地域である。安倉地区土地区画整理事業に伴う遺跡範囲確認を1972年11月末日～1973年3月末日まで実施し、武藤誠氏を団長、関学考古研が補助員にあたって調査した。その際には中世の遺物包含層と遺構を検出し、縄文時代の石鏃も出土した。

- ・宝塚市教育委員会 1973『安倉地区埋蔵文化財試掘調査報告書』

表4 宝塚市遺跡名称変遷表

旧称	1970年	1980年	1991年
長尾山古墳群	長尾山古墳群	長尾山の古墳群	長尾山丘陵の古墳群
阪急山	阪急山	中筋山手	中筋山手
稻荷神社	稻荷神社		
上中筋	庚申塚		中筋山手東
長尾山	平井	平井	平井
A 雲雀ヶ丘西	雲雀山西	雲雀山西尾根	雲雀山西尾根
B 平井			
C 雲雀ヶ丘学園グランド			
雲雀ヶ丘東	雲雀山東	雲雀山東尾根	雲雀山東尾根
A 雲雀ヶ丘ゴルフ場	雲雀ヶ丘	雲雀丘	雲雀丘
B 精常園			
C 雲雀ヶ丘			

- ・宝塚市教育委員会 1970『宝塚の埋蔵文化財』宝塚市文化財調査報告第1集
- ・宝塚市教育委員会 1980『長尾山の古墳群調査集報—雲雀山東尾根古墳群C支群2号墳・雲雀丘古墳群B支群1号墳・中筋山手古墳群5号墳—』宝塚市文化財調査報告第14集
- ・宝塚市教育委員会 1991『雲雀山西尾根古墳群 発掘調査報告書—B支群の調査—』宝塚市文化財調査報告第26集

表5 宝塚市の移管遺物目録

宝塚市コレクション番号	遺跡	年月日	内容	備考
KG寄贈資料コレクションテナ1 安倉 平井窓跡		19721225～19730114 19590531、19850518(?)	上器片、床土 上器片、窓壁片	土器片注記「19850518 平井窓」疑義あり
上中筋廻 中山大崎岩		19600508	上器片、灰化物	
五ヶ山 亮布上配水地而尾根		19701100 19761120	上器片 上器片	[長尾山分布調査]
長尾山		19591017	上器片	
八州端古墳			埴輪片	持ち込み資料
KG寄贈資料コレクションテナ2 朝使川窓跡			上器片	
KG寄贈資料コレクションテナ3 朝使川窓跡			上器片	
KG寄贈資料コレクションテナ4 雲雀丘古墳群37号墳		19720730～19720829	上器片	
雲雀山西根古墳群B支群			上器片	表採
KG寄贈資料コレクションテナ5 雲雀丘古墳群37号墳		19720809～19720829	上器片	
雲雀丘古墳群東5号墳		19720731	上器片	
雲雀丘古墳群西35号墳		19720801～19720815	上器片	
雲雀丘古墳群東7号墳			上器片	
雲雀丘古墳群東3号墳		1972810	上器片	
雲雀丘古墳群		19540203～19540204	鉄器片	
KG寄贈資料コレクションテナ6 出土地不明			土器片、埴輪片、鉄製品、石製品	

・神戸市（表6）

○舞子浜遺跡

垂水区の西側、瀬戸内海を望む場所に位置する。1960年、6月20日国道2号横の地下ケーブル施設工事現場で円筒埴輪棺が不時発見された。武藤誠氏と赤松啓介氏らが埴輪棺を確認した後、6月25日・26日の2日間発掘調査が行われ、2基の円筒埴輪棺が検出された。最初に発見された埴輪棺からは、人骨が良好な状態で見つかっている。その後、舞子公園内では十数次にわたる発掘調査が行われ、これまでに19基の埴輪棺が見つかっている。また、これらの埴輪は、五色塚古墳など同じ時期とみられる周辺の古墳出土埴輪と類似しており、同一工人によるものと指摘されている。

・兵庫県教育委員会 2005「舞子浜遺跡」『兵庫県文化財調査報告』279

・神戸新聞社会部 1961『祖先のあしあと』IV 神戸新聞社

～考古研調査経緯～

1960年6月21日に舞子から人骨が発掘された。武藤氏より連絡があり、翌日22日に見学をしに行き、1960年6月25日・26日に、発掘調査を行った。6月25日に、西宮北口に集まり、9:30から一基調査。15:00から16:00頃に人骨を棺から取り出した。25日の参加者は、武藤氏、熊野氏、橋爪氏、藤岡氏、石野氏、神戸大学生等であった。26日は、付近の人から連絡があったところの調査を行う。棺は大分壊れていた。

11月2日文化祭にて舞子浜出土の埴輪円筒棺を復元させ、展示。

（関西学院大学考古学研究会 S33～S36年の日誌より抜粋）

(表6) 神戸市の移管遺物目録

遺物コンテナ番号	遺物名	年月日	内容	カート内 容	備考
舞子2 C	舞子浜遺跡	19600620	円筒埴輪棺	舞子2c	
舞子2	舞子浜遺跡	19600626	円筒埴輪棺	舞子2、舞子2d	「6/26 B地区南」というカードあり
記載なし	舞子浜遺跡	19600620	円筒埴輪棺	出土地不明 A、舞子2c	別遺跡のものと思われるものあり
出土地不明 A	舞子浜遺跡	19600620	円筒埴輪棺	出土地不明、出土地不明 A	
舞子2 b	舞子浜遺跡	19600620	円筒埴輪棺	舞子2b、舞子2d	

### 3. 関西学院大学考古学研究会部室残置の遺物類について

藤原光平

本書では、関西学院大学考古学研究会（以下、考古研）でかつて保管され現在は各自治体に移管された資料群の報告をおこなってきたが、それ以外に、本報告時点で自治体への移管ができていない、もしくは出土地不明のため残置せざるをえない遺物群が存在している。さらに、出土遺物以外にも調査記録として作成された各種図面類が現在も部室に多数残置されている。

これらの資料群については、今後さらなる整理が進み、新たな調査時の情報が見つかることにより移管がなされる可能性も考えられ、また図面については未報告の貴重資料も存在し学術的価値も無視できないものがあるため、現時点で確認できた残置資料の内、主だったものの概要について報告する。

報告に際しては、遺跡の所在する自治体ごとにまとめて列記することとする。なお、各資料の内容を1点ずつ報告することは紙面の都合上困難であるため、遺跡ごとに内容の概要を報告することとする。

#### 遺物の概要

##### ①西宮市関西学院大学構内古墳出土資料

関西学院大学構内古墳出土資料については、前述の報告にある通り、大半の資料は西宮市に移管している。しかし、移管作業後に考古研部室において「K.G. オク」「34.3. ●」等と注記された須恵器片2点及び鉄製品資料群が新規で発見された。

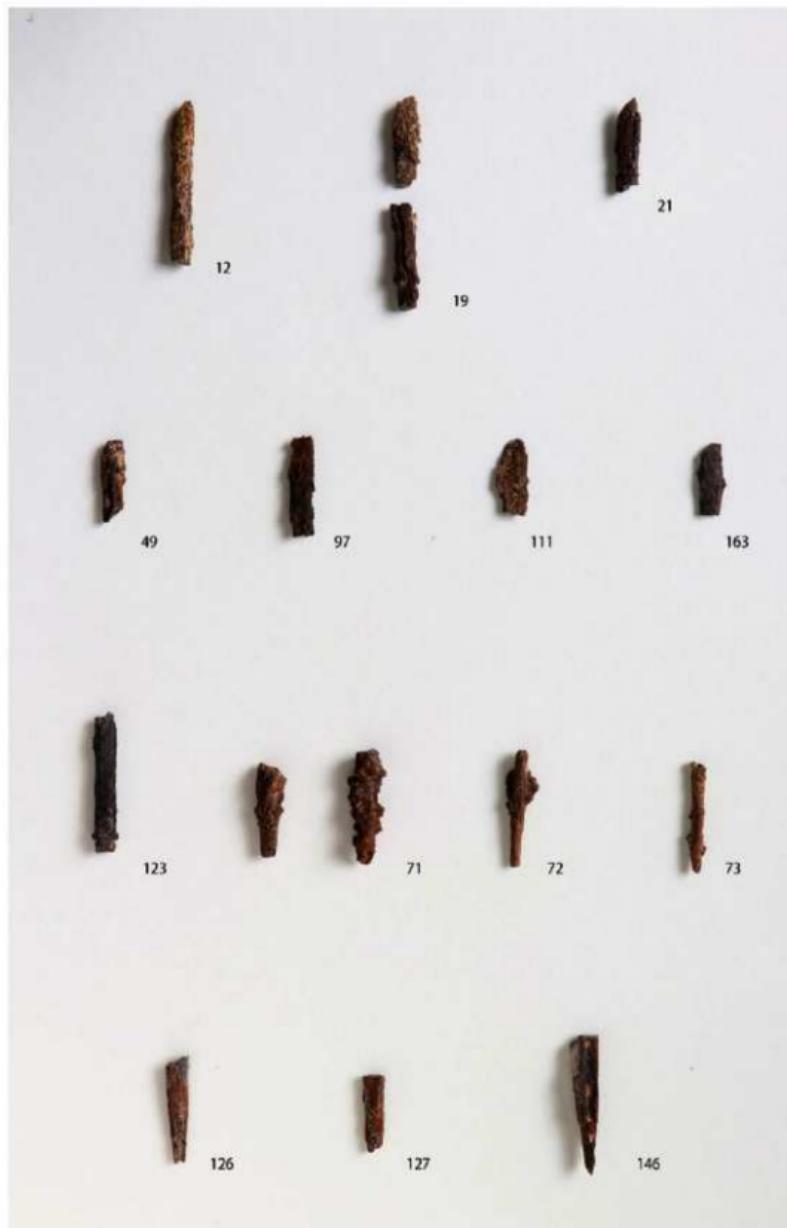
須恵器片については、壊の破片と器種不明の頸部片がそれぞれ1点ずつ確認できた。一方、鉄製品資料群は小袋79個に分けて保管されており、各袋には上記の注記とともに取り上げ番号と考えられる数字が記載されている。鉄製品の内容は古墳時代の鉄鏃と考えられるものが多数を占め、その他、鉄釘と思われる資料（時期不明）も混在している。その鉄鏃については完形の資料ではなく、刃部・頸部・茎部・関部の各部位の破片資料が散見される。各部位の形状をみると、刃部は片刃の型式が、関部は突起が左右につく棘状関と考えられるものが確認できる。

構内古墳の出土遺物については、『関西学院考古』第2号で報告されており、鉄鏃は4点出土と記載されているが、詳細については記されていない。

残されている鉄鏃資料の刃部の点数は報告されている4点以上あるため、確実に構内古墳出土資料と判断することは現状では困難であり、今後さらなる検討が



関学構内古墳出土須恵器



関学構内古墳出土鉄製品①（遺物右下の数字は取り上げ番号）



関学構内古墳出土鉄製品②（遺物右下の数字は取り上げ番号）

必要であると考える。

ただし、これまで実態が不明であった構内古墳の鉄製品である可能性がある資料が発見されたことは、古墳の内容を考える上でも非常に重要であると考えられる。

## ②宝塚市長尾山丘陵の各古墳群出土資料

宝塚市の長尾山丘陵には数多くの古墳群が立地しており、考古研が長年測量調査などを精力的に実施してきたフィールドである。それらの古墳群から出土したと考えられる須恵器や鉄製品等の所蔵資料の大半は宝塚市に移管したが、「雲雀丘出土」と注記された資料が入ったコンテナ 1 箱分の鉄器資料が現時点では未移管である。

これら未移管資料の内、鉄刀 2 点や鉄鏃 3 点などは『関西学院考古』第 10 号で報告済である（真田・藤原 2007）。詳細についてはそちらの報告に譲るが、鉄刀は残存長 34.0 ~ 35.5 cm を測り、鉄鏃はいずれも長頭式で三角式独立片逆刺三角形長頭鏃が 1 点、脇抉柳葉式長頭鏃が 2 点あり、時期が比較的限定される貴重な型式である。

また、今回の調査で前述の報告に記載されていない資料が存在していることが判明した。その内、「HBW」という注記のついた須恵器片や、「雲雀丘 C37 号」という注記のついた遺物群（鉄器と人骨片）がある。

須恵器片は 9 袋あり、甕の破片が多数を占める。「HBW」という注記から雲雀山西尾根古墳群内の古墳から出土したものと考えられる。1972 年に行われた雲雀山西尾根 B2 号墳の発掘調査では石室南東隅に多量の須恵器甕破片敷いていたことが報告されており、それらの資料に該当する可能性が考えられる（註 1、宝塚市教委 1991）。

「雲雀丘 C37 号」という注記のついた資料としては、鉄器片が数点あり、中には鉄刀の鍔と考えられる破片も見受けられる。人骨は歯が付着した状態の顎部の破片が 2 点ある（註 2）。



雲雀山西支群 B1 号墳出土？須恵器



雲雀丘古墳群西 C37 号墳？出土遺物（上：鐵製品、下：人骨）



雲雀丘古墳群出土馬具



出土地不明（2号墳出土）鉄製品

さらに、「雲雀丘古墳群出土」というカードが入った各種馬具製品が存在することが確認できた。いずれのものも完存はしていないが、直径9.0cmほどの環状鏡板3点と引手の破片が数点、さらには兵庫鎖と推定される破片が1点確認でき、これらが同一個体とすると環状鏡板付轡に復元できる。また、それら以外にも鉸具の破片や、馬具と思しき形状の破片が数点存在しており、断片的な資料ではあるが、学術的価値は無視できないものがある。

なお、前述の馬具製品と同じ場所に保管されていたものとして、「2号墳出土」と注記されたカードの入った平根系の鉄鎌4点がある。現状では出土地が確定できるものではないが、西宮市史第7巻所載の五ヶ山2号墳の紹介箇所に類似する資料が掲載されていることから同古墳出土資料である可能性が考えられる（註3、西宮市役所 1967）。

### ③尼崎市栗山遺跡表採資料

「栗山表採」と注記に記載された資料群で、尼崎市栗山庄下川遺跡より採取された資料群と考えられる。後述の図面資料報告でも紹介するが、これらの遺物の実測図面をもとに作成されたトレース図が考古研で所蔵されている。

栗山庄下川遺跡は、尼崎市中央部や西北の庄下川にかかる上生島橋と生島橋の間の川床を中心に広がる遺跡で、標高約2.2mの沖積地に立地し、弥生～中世の遺物が多く出土している。現時点で確認できる資料は49袋分で、弥生土器や土師皿、瓦片や瓦器梶の破片などがあり、非常に多様な年代のものが残されている。



栗山遺跡表採資料

#### ④小野市表採資料

コンテナ1箱分に遺物番号及び「出土地 小野」と注記された弥生土器片及び須恵器片が16袋分存在している。それ以上の注記はないため、小野市内のどの遺跡からもたらされた資料かは残念ながら不明である。

#### ⑤その他

上記以外に、採集された自治体名はわかるが遺跡名は不明なもの、もしくは全く出土地が分からぬものがある。

兵庫県内の資料としては、まず「万ライ山」と注記された埴輪片が3点あり、宝塚市の万籠山古墳からもたらされたものと推定される。

それから、「三田」と注記されたコンテナが1箱残されており、兵庫県三田市内で出土・採集された資料群と考えられる。ただし遺跡名を示す注記はなく、出土地は不明である。遺物の内容としては、須恵器片が多く、それ以外にはやや大型の埴輪片やほぼ完形の唐草文軒平瓦、さらには三田青磁の焼型が1点存在する。その三田青磁焼型には「文政九戌春 / 清兵衛 作」という銘が刻書されており、年代がわかる貴重な資料である。

そのほか、他府県所蔵の資料としては、まず「AKN」や「浅井町北野遺跡」と注記された資料群がある。これは滋賀県浅井町北野遺跡を指し、考古研が調査に携わり、『関



「小野市」注記資料



「万ライ山」注記埴輪片



「三田」注記唐草文軒平瓦



文政9年銘三田青磁焼型

西学院考古』第6号で報告を行っている。遺物の内容をみると、報告されている写真図版と内容が一致しており、この調査によって出土した遺物ではほぼ間違いないであろう。

これ以外の他府県出土・採集の資料を列記すると、大阪府舟橋遺跡採集土器資料、大阪府高槻市安満遺跡採集資料、河内国分（大阪府柏原市か）採集土器資料、奈良市黄金塚東方採集埴輪資料、宮城県縄文土器資料、青森県縄文土器資料などがあるが、いずれも詳しい採集経緯や内容は現時点では不明である。

さらに、注記が全くない資料群がコンテナ約9箱分残されており、中には弥生土器や瓦など、貴重な資料が多く残されており、今後も整理を継続しリストを作成する必要があると考えられる。

## 図面資料の概要

考古研所蔵図面が作成された遺跡の所在地域は、主に関西学院大学の所在する阪神地域（西宮市・宝塚市・芦屋市・尼崎市）と、同じ兵庫県内の播磨地域（小野市・三木市・加西市）、そして80～90年代に考古研がフィールドワークをおこなっていた近江の湖西地域（元高島市）となっている。

図面は、発掘・測量調査に伴って作成されたもので、その内容は平面図・断面図・土層図・平板測量図などが多く、原図だけでなく原図のコピーやトレース版下（レイアウト図）、トレース図など、報告書作成段階の資料も存在している。また、古い調査に関連する図面としてはコピーの代わりに作成された青焼図面もあり、これらは報告もしくは研究用に保管されていたものと考えられる。

### ①西宮市

#### ・上ヶ原入組野所在古墳

関西学院大学上ヶ原キャンパスの東方に位置する上ヶ原入組野所在古墳の墳丘及び石室の図面である。原図ではなく青焼図面であり、墳丘は1953年6月、石室は1953年12月16～17日と調査期間が明記されている。石室図面には「武藤・飯田」と記載があり、武藤誠氏が調査をおこなったことがわかる。これらの図面については、武藤誠1959において報告がなされている。

#### ・関西学院構内古墳

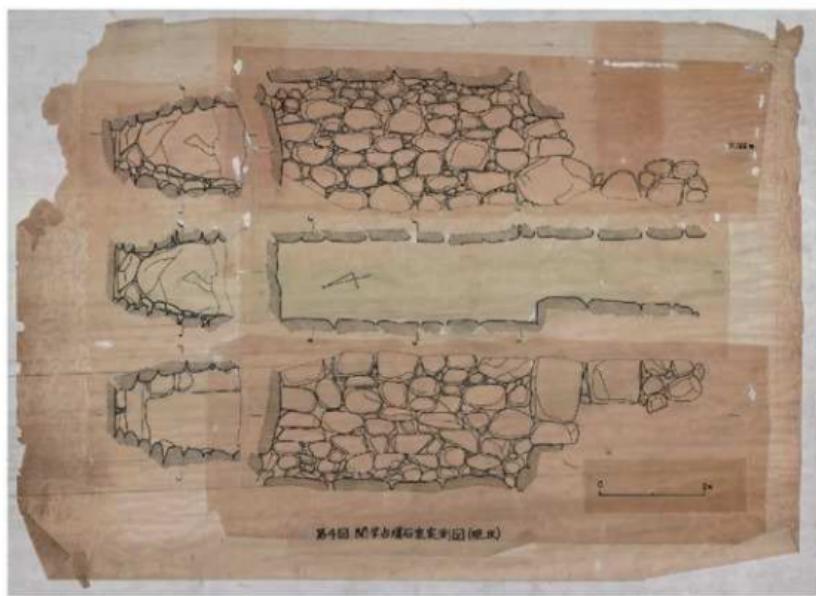
1975年に『関西学院考古』第2号で報告された構内古墳の測量図面の原図が存在している。ただし、調査期間は1974年と1976年のものが存在しており、後者は報告後に再測量された図面と考えられる。原図だけでなく、トレース図も存在しており、調査から報告までの整理過程がわかるようになっている。

#### ・五ヶ山遺跡

関西学院大学上ヶ原キャンパス周辺に所在する弥生時代の集落遺跡であり、出土遺物も大量に所蔵していた。図面は住居跡のトレース図と遺物実測図の原図が残されており、遺構のトレース図については1号住居跡及び3号住居跡との記載があることから、昭和45年（1970）に考古研が実施したNo.4地点の調査成果物と考えられる。これらは、1975年に西宮市教育委員会が発行した報告書に掲載されている（西宮市教委1975）。遺物実測図については報告済の資料かは不明である。

#### ・五ヶ山古墳群

関西学院大学上ヶ原キャンパス周辺に所在する五ヶ山古墳群第1～2号墳の関係図面である。図面種類はトレース図及び青図のみとなっており原図はない。1976年報告の「仁川流域の後期古墳」『関西学院考古』第3号などに使用するために作成された図面類と考えられる。



関学構内古墳測量図面

・甲風園所在遺跡

西宮市甲風園で採集された弥生土器のレイアウト図及びトレース図がある。これらの図面は、1978年の『関西学院考古』第4号において報告されている。

・苦楽園遺跡分布図

昭和32年発行の1/3000地図に遺跡の位置がプロットされた図面が1点残されているが、いずれの報告の元となったものかは不明である。

(2)宝塚市

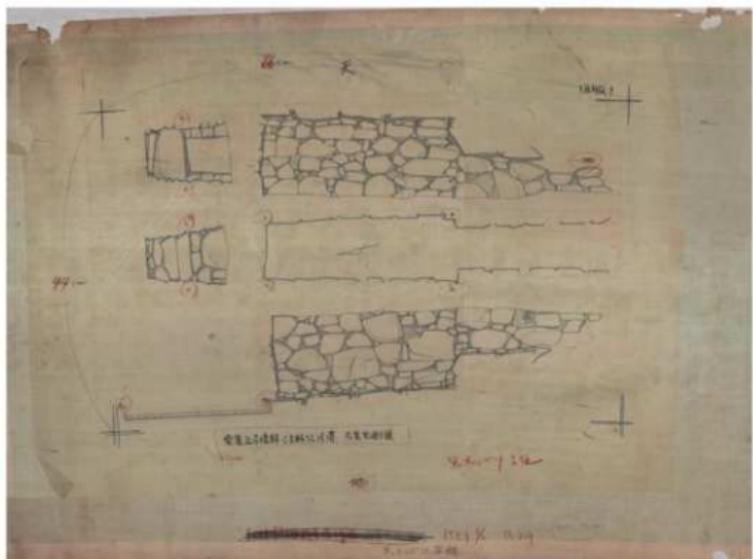
宝塚市関係の図面は、五ヶ山所在の仁川旭ヶ丘古墳群と長尾山丘陵に所在する古墳群の測量調査で作成されたもので、前者は正報告が刊行されており、後者は『関西学院考古』の「長尾山の古墳群」シリーズで報告されている。

・仁川旭ヶ丘古墳群

墳丘の平板測量図の原図が1点あり、1972年3月10～15日に作成されている。同年に正報告が刊行されており、同図面が掲載されている（仁川旭ヶ丘古墳群調査委員会1972）。

・中筋山手古墳群

長尾山丘陵に所在する古墳群の1つで、1・4・5号墳の石室及び墳丘の測量図がある。1977～1978年に測量されたもので、1978年の『関西学院考古』第4号に報告が掲載されている。



雲雀丘古墳群C支群北1号墳測量図面

#### ・雲雀丘古墳群

長尾山丘陵に所在する古墳群の1つで、非常に多くの古墳で構成されているが、その中でC北支群の1・3・4・6号墳の墳丘及び石室の測量図面が残されている。調査期間はクリニック前古墳(1号墳?)は1975年、それ以外は概ね1978年に行われており、1979年の『関西学院考古』第5号で報告されている。

#### ・天満神社古墳

長尾山丘陵に所在する山本古墳群C支群に属する古墳の1つで、1989年に調査がおこなわれた。所蔵図面は墳丘測量図の原図以外は全て原図コピーである。1991年に『関西学院考古』第9号で報告されている。

### ③芦屋市

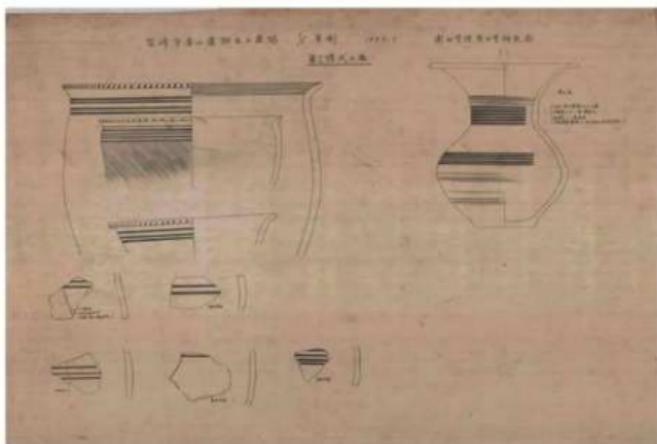
#### ・会下山遺跡

1956年に発見された弥生時代の高地性集落遺跡であり、現在国指定史跡に指定されている。所蔵図面はトレース図1点と青図3点で、1958年に調査された竪穴住居址の図面と1960年作成された竪穴住居址の復元図である。いずれも1964年発行の『会下山遺跡』に所収されている。

### ④尼崎市

#### ・栗山遺跡

先述した尼崎市栗山庄下川遺跡出土の資料群をもとに作成された図面と推測される。内容は全て遺物のトレース図で「1959年7月」作成との記載がある。本調査の報告は1974年に刊行されており、同様の遺物の図面が掲載されているが、レイアウトや実測図の内容が若干異なり、所蔵図面がそのまま利用されているものではない。そのため、所蔵図面は何らかの理由で考古研が独自に作成したものと考えられるが詳細は不明である。



栗山遺跡出土遺物実測図面

## ⑤三本市

### ・志染経塚

三本市志染町窟屋高男寺に所在する経塚で、「高男寺経塚」とも称される遺跡である。明治17年（1884）に村人がため池の修繕を行っていたところ、高男寺跡から法華経や仏具を収納した埋経筒が発見された。現在、この経筒は兵庫県立歴史博物館に寄託されしており、兵庫県指定文化財となっている。

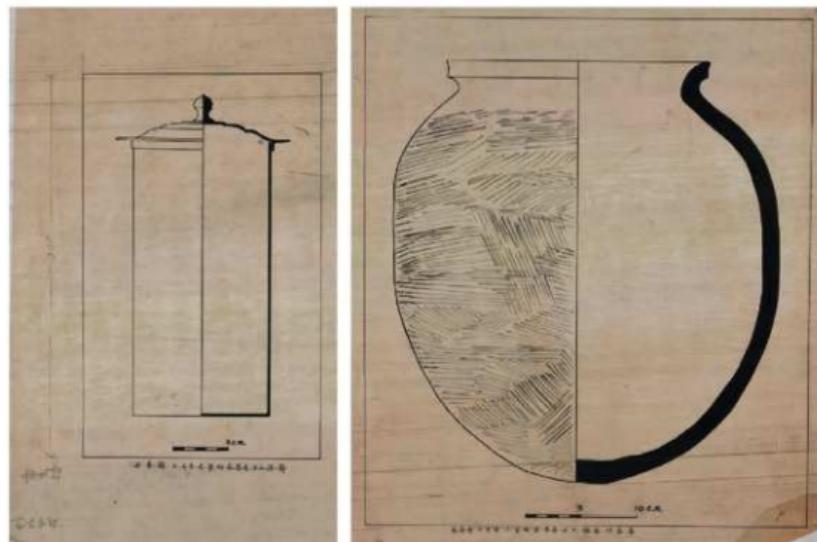
所蔵しているのはこの経筒の実測原図及びトレース図であるが、作成に関する注記は見受けられず、年月日や実測者は不明である。

これらの資料は、武藤誠 1964 での報告図版に使用されており、本稿執筆のために作成されたものと考えられる。稿中の記載によると、当時武藤氏が兵庫県文化財専門委員を務めておられた関係で経塚出土資料の調査を依頼され実施したとのことで、破損していた経筒埋納陶器壺を研究会会員によって復原をおこなったとも記載されている。よって、これらの図面もこうした調査の一環として研究会会員の手によって作成された可能性が考えられる。

## ⑥加西市

### ・周遍寺山古墳群

1958年に調査された古墳で、所蔵されているのは1号墳の測量の青図である。加西市史などで報告がなされている。



志染経塚出土遺物実測図面

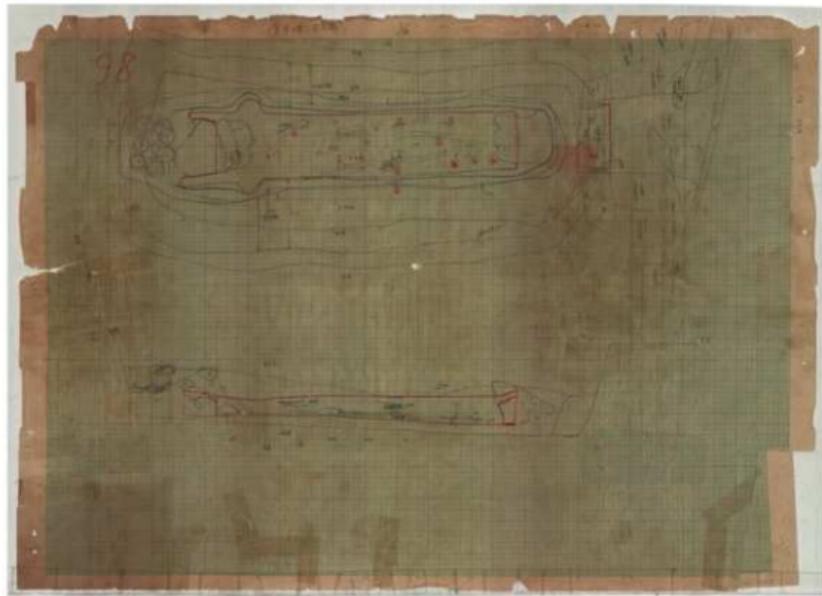
## ⑦小野市

### ・焼山古墳群

この古墳群は1958年に調査されたもので学史上非常に重要な調査として位置づけられている。ただし、その成果はほとんど公開されておらず、その一部が『小野市史』などに報告されているのみである。考古研で所蔵しているのは、3・4・17・19・21号墳の調査に関する図面で、3号墳以外は埋葬施設の遺物出土状況図がある。これらのほとんどは未報告の原図であり、なおかつ遺物の詳細な出土状況が記載されていることから、学術的価値は非常に高いものと考えられる。これらが考古研で所蔵されていた詳細な経緯については不明であるが、当時の焼山古墳群発掘調査団の団長を務めたのが武藤誠氏であり、武藤氏と考古研会員がその後の報告に何らか関わる予定でもたらされた可能性が考えられる（神戸新聞社社会部編 1958）。

### ・小野王塚古墳

播磨地域を代表する中期古墳であり埋葬施設から銅鏡・甲冑・刀剣類などの貴重な遺物が出土している。所蔵しているのは埋葬施設の図面でいずれも原図である。2006年に遺物の整理報告書が刊行され、出土状況図も所収されている（小野市教委 2006）。



焼山17号墳B主体部実測図面

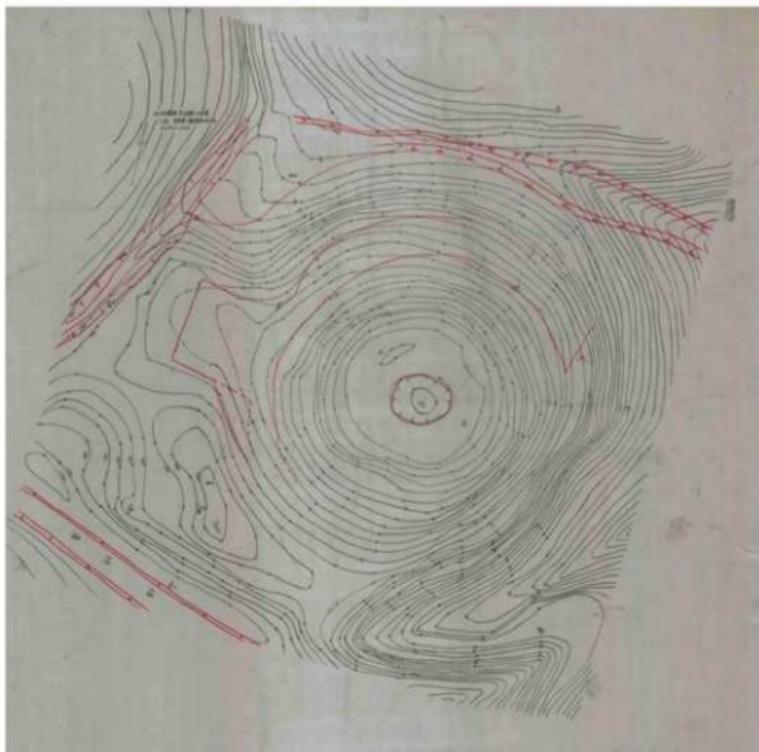
## ⑧高島市

### ・鴨籠荷山古墳

墳長約50mを測る前方後円墳で滋賀県指定史跡となっている。大正12年に剝抜式家形石棺が発掘されており、所蔵しているのは発掘後に現地で保存されている家形石棺の実測図である。家形石棺の図面は各種研究論文で公表されている。1978年11月、考古研が滋賀県技師兼康保明氏と高島町教育委員会の協力のもと古墳の現況測量を実施した際、家形石棺も実測された。

### ・押戸古墳群

1991年に第2支群第1号墳が、1992年に第3支群第5・6・7・8・10号墳と第4支群第3号墳の調査がおこなわれた。いずれも墳丘及び横穴式石室の測量調査であり、その際に作成された原図が所蔵されている。調査の成果は、1987年刊行の『関西学院考古』第8号に第3支群第10号墳の報告が掲載されている。



押戸古墳群第3支群第10号墳墳丘測量図

#### ・白髭神社古墳群

1988年に1号墳の墳丘及び石室の測量調査がおこなわれ、その際に作成された実測図の原図が所蔵されている。1991年の『関西学院考古』第9号に掲載の報告において所収されている。

#### ・音羽古墳群

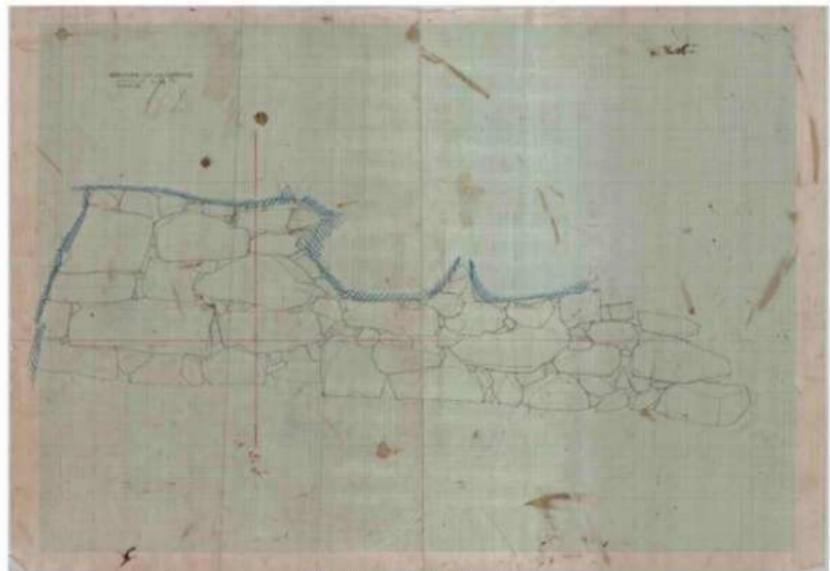
高島市音羽に所在する約50基からなる古墳群で、1号墳の横穴式石室の実測原図が残されている。注記から1992年9月に調査がおこなわれたことがわかる。

#### ・坂畠古墳群

注記には「坂畠古墳群」と記載されているが高島市鶴川に所在する坂畠古墳群のものと考えられる。1号墳墳丘の平板測量図が1点のみ残されているが、注記がほとんどないため、調査時期などは不明であり、未報告資料と考えられる。

### ⑨その他

注記がほとんどないため遺跡名が不明の土層図の青図が2点存在している。いずれも体裁がほぼ同じであることから同じ遺跡の調査で作成されたと考えられる。遺跡名の特定作業として、1970年11月に調査されたことが注記されており、考古研の調査年表と照合すると、西宮市甲山山頂銅剣出土地点か川西市加茂遺跡（市道11号線）の調査である可能性が考えられる。



白髭神社古墳石室実測図

## 所蔵図面からみる考古研の活動状況

ここでは所蔵している図面資料の学術的価値について若干の私見を述べたい。なお、残されている図面の内、青焼図面については実際の調査への関わりと関係なく、学術目的で入手した可能性があるため、対象から除外して検討したい。その上でまず、所蔵している原図及びトレース図関係を、作成された調査の内容によって分類してみると以下のようになる。

### A. 武藤誠氏調査関係の図面

- B. 考古研の事業として実施し、「関西学院考古」において報告された調査関係の図面
- C. 各自治体主体の発掘調査及びその報告に関連する図面

まず、Aに該当するのは、①の上ヶ原入組野所在古墳や、⑤の志染経塚、⑥の周遍寺山古墳群、⑦の焼山古墳群などで、概ね1950～70年代の考古研発足以前からの調査に関するものがほとんどである。この中では特に焼山古墳群の未報告図面類から得られる情報は非常に多く、今後の活用が期待される。

次に、Bに該当するのは、①の関学構内古墳や、考古研が長年調査のフィールドとしていた②宝塚市の長尾山丘陵の古墳群と、⑧湖西地域（高島市）の古墳群に関する図面類で、ほとんどは「関西学院考古」で報告されているが、高島市の押戸古墳群や音羽古墳群など調査図面の一部は未報告であると考えられ、今後地元自治体などで活用されることを期待したい。

最後に、Cに該当するのは①の五ヶ山遺跡、②の旭ヶ丘・五ヶ山古墳群、④栗山遺跡などがあげられ、会員が発掘調査及び整理作業に参加し、報告書作成を補助した関係で残された図面類と考えられる。中でも五ヶ山遺跡の調査は考古研黎明期の重要な関係事業であったと考えられ、会史を紐解く上でも重要な資料であると思われる。

このように、考古研所蔵資料は遺物類だけでなく図面類についてもさまざまな面から価値づけが可能であり、今後、各自治体に移管するにせよ、考古研で保管するにせよ、永く後世まで残していくべき文化財資料であると考えられる。

## 小結～残置資料の今後の活用に向けて～

関西学院大学には専門講座が存在しないことから、ここで紹介した残置資料は学内唯一の所蔵考古資料であると考えられる。そのため、その教育的価値を鑑みたときに、学内において文化財資料の取扱について学ぶ授業（歴史関係の史料講読や学芸員課程関係の講義 etc.）において、非常に有効な教材となりうるのではないかと考える。今後、これら資料の情報を学内の教員などに周知した上で、授業への活用を検討する余地はないだろうか。

また、大学内の団体が関与した調査によって取得した資料群という側面もあることか

ら、大学史を構築する上でも重要な情報を提供するものであり、学内全体においてもこうした資料群の存在を周知する必要があると考える。具体的には、学内のしかるべき施設において資料を一定期間展示し、学生や一般客に観覧していただくなどの手段が考えられ、そのための関連機関との連携についても考慮すべきである。

なお、これら残置資料を今後の保存活用する上で考慮すべき点として、鉄製品類の保管環境の整備があげられる。残置された鉄製品類については、現状、市販のタッパーに簡易な梱包を施した上で収納し保管されていることから、今後状態の悪化が高い確率で見込まれる。そのため、保存処理をおこなうか、もしくは環境が安定した保管設備にて保存されることが望まれる。

#### 【註釈】

註1 当古墳の情報については岡野慶隆氏よりご教示いただいた。

註2 C37号墳という注記については、雲雀山西尾根B2号墳を旧名称A37号墳と呼んでいたことと関係するのではないかとの情報を岡野慶隆氏よりご教示いただいた。また人骨の出土地については、上記古墳から出土していないことから、記録上出土が伝えられる雲雀丘古墳群C南1号墳の資料ではないかとの情報も合わせてご教示いただいた。

註3 註1と同じ。

#### 【参考文献】

尼崎市教育委員会 1974『尼崎市域発掘調査報告書 昭和25~38年』

小野市教育委員会 2006『小野王塚古墳出土遺物保存処理報告書』小野市文化財調査報告27

折井千枝子・坂井秀弥 1978『西宮市甲風園採集の弥生式土器』『関西学院考古』第4号、関西学院大学考古学研究会

関西学院大学考古学研究会 1975『構内古墳現状遺物報告』『関西学院考古』第2号

関西学院大学考古学研究会 1976『仁川流域の後期古墳』『関西学院考古』第3号

関西学院大学考古学研究会 1978『長尾山の古墳群(I)~中筋山手古墳群~』『関西学院考古』第4号

関西学院大学考古学研究会 1979『長尾山の古墳群(II)~雲雀丘古墳群~』『関西学院考古』第5号

関西学院大学考古学研究会 1979『高島郡高島町鶴船荷山古墳現状実測調査報告』『滋賀文化財だより』

22 財団法人滋賀県文化財保護協会

関西学院大学考古学研究会 1980『長尾山の古墳群(III)~雲雀山西尾根古墳群~』『関西学院考古』第6号

関西学院大学考古学研究会 1987『滋賀県高島郡押戸古墳群第10号墳現状調査報告』『関西学院考古』第8号

関西学院大学考古学研究会 1987『長尾山の古墳群(IV)~雲雀山西尾根古墳群~』『関西学院考古』第8号

関西学院大学考古学研究会 1991『長尾山の古墳群(V)天満神社古墳』『関西学院考古』第9号

関西学院大学考古学研究会 1991『滋賀県高島郡高島町白鬚神社古墳群』『関西学院考古』第9号

宝塚市教育委員会 1991『雲雀山西尾根古墳群 発掘調査報告書 -B 支群の調査-』『宝塚市文化財調査報告』第26集

- 岸本直文 1997 「焼山古墳群」「小野市史」第4巻史料編1、小野市  
 神戸新聞社社会部編 1958 「後期古墳の性格—焼山群集墳を中心に—」「祖先のあしあと」IV  
 仁川旭ヶ丘古墳群調査委員会 1972 「仁川旭ヶ丘古墳群調査報告」仁川旭ヶ丘古墳群調査委員会  
 西宮市教育委員会 1975 「仁川五ヶ山弥生遺跡—No.4 地点の調査報告—」西宮市文化財資料第14号  
 斎田哲郎 2010 「周邊寺山遺跡」「加西市史」第7巻史料編1考古、加西市  
 藤原光平・真田陽平 2007 「資料紹介 関西学院大学考古学研究会所蔵資料」「関西学院考古」第10号  
 武藤誠 1959 「西宮市上ヶ原入組野在横穴式石室古墳の発掘」「関西学院史学」5号  
 武藤誠 1964 「兵庫県三木市志染町出土の経筒と埋納經典」「人文論究」14-4  
 村川行弘・石野博信 1964 「会下山遺跡」芦屋市文化財調査報告第3集、芦屋市教育委員会  
 西宮市役所 1967 「西宮市史」第7巻 資料編4

考古研所蔵図面一覧表

自治体名	遺跡名	図面種類・内容	点数	参考文献
西宮市	上ヶ原入組野所在古墳	墳丘・石室測量図	2	武藤誠1959
	関西学院大学構内古墳	墳丘・石室測量図	15	関西学院大学考古学研究会1975
	仁川流域の後期古墳	古墳分布図	1	関西学院大学考古学研究会1976
	五ヶ山遺跡	第1号住居址実測図	6-	
	1号墳	遺物・石室測量図	2	
	五ヶ山古墳群	遺物(土器・石棺材・鉄器)実測図、墳丘測量図	5	関西学院大学考古学研究会1976
	甲風園遺跡	採集遺物実測図	2	折井千枝子・坂井秀介1978
	青葉園遺跡	-	2-	
	仁川旭ヶ丘古墳群	第1・3号墳 古墳群分布図	1 1	仁川旭ヶ丘古墳群調査委員会1972
	中筋山手古墳群	第1号墳 第4号墳 第5号墳	1 1 2	関西学院大学1978
宝塚市	クリニック前古墳(C北群1号墳)	墳丘測量図	1	
	C北群3・4・6号墳	墳丘測量図	1	関西学院大学考古学研究会1979
	C北群北1号墳	石室測量図	1	
	C支群北3号墳	石室測量図	2	
	C支群北4号墳	石室測量図	2	
	天満神社古墳	墳丘・石室測量図	8	関西学院大学考古学研究会1991
	芦屋市 会下山遺跡	平面図	4	村川行弘・石野博信1964
	尼崎市 東山遺跡	遺物実測図	9	尼崎市教育委員会1974
	三木市 志染経塚	遺物実測図	5	武藤誠1964
	加西市 周邊寺山古墳群	第1号墳 3号墳 4号墳 17号墳 19号墳 21号墳	4 1 1 13 13 8 20	斎田哲郎2010
小野市	焼山古墳群	A主体部実測図 A複数施設実測図 A主体部実測図 A複数施設実測図	13 1 13 4	岸本直文1997 小野市教育委員会2006
	小野玉塚古墳	-	-	
	鳴船山古墳	石室実測図	1-	
	白鬚神社古墳群	第1号墳 第2支群第1号墳 第3支群第5号墳 第3支群第6号墳 第3支群第7号墳 第3支群第8号墳 第3支群第10号墳 第4支群第3号墳	12 7- 1- 1- 1- 1- 2 1-	関西学院大学考古学研究会1991 岸本直文1997 関西学院大学考古学研究会1987
	押戸古墳群	1号墳 2号墳	5- 1-	
高島市	音羽古墳群	1号墳	1-	
	放燈古墳群	1号墳	1-	
不詳	西宮市甲山山頂鉄剣出土地点or川西 市加茂遺跡(市道11号線)	-	2-	

## 4. 関西学院大学考古学研究会の歴史

高田祐一・金岡希世乃

### はじめに

2016年、関西学院大学考古学研究会（以下、考古研）は、部室移転に伴い所蔵遺物を出土地の自治体へ移管した。2019年～2022年、移管遺物の資料調査を実施した。遺物は1970年以前のものが大半であり、現在連絡の取りうるOBにおいても遺物の経緯が不明であった。そこで、部室に残された考古研の日誌や顧問であった武藤誠教授の調査歴を整理し、遺物に注記された年月日によっていつどこの調査か特定することを試みた（表1）。その副産物として、考古研の歴史を整理することができた。特に考古研創立期の経緯は、1970年代のOBにおいても把握されておらず、はからずも自分たちの組織の由緒を知ることができた。残された日誌等を整理する中で、組織体のありかたや活動内容の観点から考古研の歴史を1期～3期に分類し整理した。なお、残された資料によって整理したものであり、すべての事績を網羅していない。間違いがある可能性もある。あらかじめご承知おき願いたい。

### 第一期（創立期）：1950年代～1970年

考古研の源流について、長らく顧問を務めた福島好和先生は、1952年6月からの関西大学考古学研究室と関西学院大学による兵庫県加茂遺跡の関連合同調査がはじまりであるとしている（福島2007）。その後、1956年4月、文学部史学科の学生による考古学研究会が発足としている。一方、部室に残されている『考古学研究会日誌 S.33.4.-S.36.6.』（以降、昭和33年日誌）（図1）によれば、1958年4月～6月、武藤誠先生を団長とする「兵庫県小野市焼山古墳群の発掘調査を機縁として学院内に考古学愛好の諸氏が結ばれる結果を生」じ、さらに同年7月・8月の芦屋市会下山遺跡発掘調査に有志が参加することで「考古学研究会設立の気運益々募」り、同年9月初めに関西学院大学考古学研究会が発足したとある（図2）。会員は他学部生も含む21名であった。1961年5月13日には、史学研究室副室にて第一回運営委員会が開催され、会名について関西学院大学考古学研究会同好会を関西学院大学考古学研究会に改名すること、顧問に栗野頼之祐教授、会長に武藤誠教授、幹事に福島好和大学院生とすることが決議された。さらに会員の枠として、正会員（史学科生）、準会員（学部学科を問わず）、特別会員（先輩）が設定された。日誌には、「関西学院大学文学部史学研究室内考古学研究会」とあることから、史学科生が主体であることがうかがい知れる。当時から、大学には考古学専攻の考古学研究室がなかったため、それを補う形で史学研究室内に考古研が設立されたと思われる。他方、学部を問わず参画できることから、サークルとしての性質も兼ね備えた組織体であったことが特徴的である。研究会の始まりについては福島好和先生と日誌の記述が若干異なるものの、1950年代に研究会設立の気運醸成と段階的な設立がなされ、61年に組織化の最初の到達点となつたということであろう。

考古研が関わる調査は、小野市焼山古墳群、芦屋市会下山遺跡、加茂遺跡、関西学院構内古墳、仁川五ヶ山古墳群、舞子遺跡、家島群島総合学術調査、大坂城総合学術調査などが主な調査である。

考古研の部室については、発足当初は武藤誠先生の個人研究室を占拠していたものの、文学部学生自治会傘下団体となり、文学部本館地下室を与えられた（福島 2007）。昭和 33 年日誌にある部室移転の記載（1960 年 10 月 17 日）がこれに該当すると考えられる。以降、文学部地下室の部室が 2016 年 6 月に学生会館へ移るまで、考古研の拠点となった。遺物についても約半世紀、文学部地下の部室に保管されることになったのである。



図 1 昭和 33 年度日誌

1958年 (5月)	4月 6日 午後 2時半より 10時半まで、城山古墳群調査 明治 25 年頃のものと想われる古墳を発見・調査・測量を行なった。
4月 7日	午後 2時半より 10時半まで、城山古墳群調査 (成馬坂段、西側の石室) と城山古墳群調査。
4月 8日	午後 2時半より 10時半まで、城山古墳群調査 (成馬坂段、西側の石室) と城山古墳群調査。
4月 9日	午後 2時半より 10時半まで、城山古墳群調査 (成馬坂段、西側の石室) と城山古墳群調査。

図 2 1958 年の日誌の記述

## 第二期（活発期）：1970 年～1990 年代半ば

1969 年、大学紛争が関学でも激しくなり、1970 年に鎮まったものの文学部学生自治会が瓦解した（福島 2007）。そのため文学部学生自治会に所属していた考古研は、大学非公認ながら、サークル（同好会）として活動していくこととなった。1973 年 3 月、「関西学院考古」創刊号が発行される。ガリ版刷りの内部学習会資料であったものの「当時、研究会の活動は行政の発掘調査の手伝いが多く、これでよいのか」という議論があったが、学術研究団体として本来の研究活動やその成果の発表の場として研究会誌の発行を望んでいたのではなかろうか」（岡野 2007）という当時の会員の意志の発露であろう。1975 年の第 2 号では、関西学院構内古墳の測量調査報告などの学術的内容を輪転機で印刷したものとなった。そして 1976 年の第 3 号には活字印刷となり、以降の会誌発行のスタイルが確立した。『関西学院考古』は、「学生諸君がそれぞれ費用を持ち寄り発行した意義ある機関紙」（福島 2007）とあるとおり、学生自身の意志による独自調査と考察に大きな特徴がある。2 号～9 号、不定期ながらコンスタントに発行された。1991 年の 9 号発行を最後に 90 年代半ばから組織的な学術的活動の実態が把握できなくなる。

第二期の主な調査は、関西学院構内古墳、五ヶ山遺跡、宝塚市雲雀丘古墳群、川西市加茂遺跡、滋賀県高島町押戸古墳群等である。

## 第三期（転換期）：2000 年～

2002 年、文学部事務室から文学部地下の部室について明け渡しの要求があった。大学事務としては、大学非公認団体が文学部棟の一角を占有する根拠がない、という旨であった。事務的な管理の取り扱いとしては、理があると感じたものの、考古研の立場としては遺物を保管している実態があり、地下室を利用しているのも過去の歴史や経緯があつてのことであるため、簡単に了承できるものではなかった。そこで、非公認であることが問題であれば、公認であれば解決すると考え、大学公認の部としての昇格を目指

すこととした。その結果、2003年4月に文化総部に昇格した。しかし、90年代半ばから考古研独自の調査が実施されておらず、測量機材については老朽化あるいは破損している状態であった。また現地調査し、それを刊行物にするというすべてのノウハウが失われている状態であった。そこで、古川久雄氏、藤川祐作氏から指導をうけながら、徳川大坂城東六甲採石場甲山刻印群の分布調査を実施し、それを2007年3月に『関西学院考古』10号としてまとめた。前号の9号から16年あいた発行となった。2006年3月、考古研の創立期から関わってこられた福島好和先生が定年で退官され、中西康裕先生が顧問となつた。2000年代は、第二期から途切れてしまった学術的活動の再始動期となつた。

2016年、部室を文学部地下の部室から学生会館に移転させることとなつた。新部室では、遺物を収蔵できないことから、1月・2月に西宮市・姫路市・神戸市・宝塚市・川西市に遺物を移管した。移管後、何を移管したかという記録に着手したところ、コロナ禍によって中断せざるを得なくなつた。小康状態となつた2021年12月～2022年1月に集中的に移管後の調査を行い、その結果を本11号に掲載することとなつた。

#### 終わりに

以上、考古研の歴史70年を3期に分けて整理を試みた。昭和30年代から、大学・学生・サークル、また考古学のあり方は変化し続けている。調査研究の対象や方法もこれから変わり続けるだろう。ただし、1950年代から続く「考古学愛好の諸氏が結ばれる結果」としての考古研は不变であることを確認した。学生が4年間で入れ替わる以上、活動の盛衰や学術レベルの不安定化は避けられない。しかし、いつの時代も活動の根源は、学生自身の意志であり、それが枯れない限り考古研は安泰である。

#### 注

福島好和 2007 「関西学院大学考古学研究会の設立と武藤誠「古墳のあるキャンパス」の紹介」『関西学院考古』第10号

岡野慶隆 2007 「『関西学院考古』創刊の頃」『関西学院考古』第10号

#### 付表 関学考古研関係年表に関する注意点

- ・武藤誠先生の調査歴は、『誠の人：武藤誠先生追悼録』武藤誠先生追悼録刊行会から整理した。ただし、原則今回の移管遺物に関わるもののみとする
- ・そのため、神戸市（舞子浜遺跡以外）、尼崎市、三木市、芦屋市、伊丹市の武藤先生の調査歴は対象外とする
- ・川西市、宝塚市、西宮市は、遺物の注記年と調査歴を精査するものの、すべての遺物に注記がなされていないため、今後の参考のために3市の武藤先生調査歴は残しておく
- ・関学考古研調査歴でも、研究会独自調査のものと、行政から研究会に声掛けしてもらって参加しているものがあると思われるが、現状では区別できないため、混在している可能性がある
- ・2000年代以降の個人でアルバイトとして行政調査に参加しているものは一切入れないものとする

関学考古研関係年表

年	月	武藤先生調査歴 調査名	関学考古研調査歴等 内容 太字は考古研主体	記載のある文献
1952年	6月 ～7月 8月～ 10月 11月～ 12月	川辺郡川西町 加茂遺跡発掘調査		
1957年	3月～4月	小野市焼山古墳群発掘調査		「祖先のあしあと」IV p.11～
1958年	4月～6月		小野市焼山古墳群発掘調査 (大学内考古学愛好諸氏)	『考古学研究会日誌』 S33.4-S36.6(以下、昭和33年 日誌)
1958年	7月		西宮市仁川町五ヶ山遺跡発 掘調査	
1958年	7月～8月		芦屋市会下山遺跡発掘調査	
1958年	7月～8月	加西郡加西町周遍寺山古墳		「祖先のあしあと」IV p.146～
1958年	8月～10月	西宮市仁川町五ヶ山 遺跡発掘調査		
1958年	8月	川西市加茂遺跡発掘 調査		
1958年	9月		関西学院大学考古学研究会 発足(会員21名)	
1958年	11月～ 12月		西宮市仁川町五ヶ山遺跡遺 物整理	
1958年	11月		雲雀ヶ丘古墳出土須恵器実 測&復元	
1958年	12月		広野出土陶棺復元	
1958年	12月		伊丹市良蓮寺跡発掘調査	
1959年	1月		五ヶ山にて処女墳発見。弥 生土器片採集。古墳遺物採 集(各種鉄器)	
1959年	2月		関学構内古墳石室発掘調査	
1959年	3月		雲雀ヶ丘・山本・中山各古 墳群パトロール。地形略図・ 古墳群図・石室測量。	
1959年	3月		伊丹庵寺跡測量	
1959年	3月		奈良市円照古墳群・狐塚、 測量および発掘調査	
1959年	3月		芦屋市八十塚古墳発掘調査	
1959年	4月		大阪城総合学術調査(石垣 刻印調査)	

1959年	5月～7月		関学構内古墳遺物整理	
1959年	6月		奈良黄金塚東方出土埴輪実測	
1959年	6月		吹田竜ヶ池窯跡表面採集須恵器実測	
1959年	6月		大阪舟橋遺跡遺物実測	
1959年	6月～7月		尼崎栗山遺跡発掘調査	
1959年	6月～9月・11月		尼崎栗山遺跡遺物整理	
1959年	6月		伊丹廢寺実測	
1959年	6月		加茂遺跡石器類実測	
1959年	7月		芦屋市六麓荘町古墳発掘調査	
1959年	7月		会下山パトロール	
1959年	7月		五ヶ池付近の古墳調査（サスカイト発見）	
1959年	7月（本調査）	飾磨郡家島町西島大山神社遺跡、チンカンドー、ヒシノタイ古墳発掘調査	家島群島総合学術調査	「祖先のあしあと」IV p.184 家島群島総合学術調査団 1962 『家島群島』（神戸新聞社）
1959年	8月～9月		伊丹市良蓮寺跡発掘調査	
1959年	8月	芦屋市会下山遺跡発掘調査	芦屋市会下山遺跡発掘調査	
1959年	10月		和歌山の奥氏より宮城県出土繩文時代遺物の寄贈有り	
1959年	11月		関西学院70周年祭の展覧会に出席	
1959年	11月		伊丹御願塚測量	
1959年	11月		家島群島遺跡出土遺物実測	
1959年	11月		法隆寺若草伽藍発掘調査	
1959年	11月		加茂遺跡パトロール	
1960年	1月		伊丹市良蓮寺跡発掘調査	
1960年	2月		加茂遺跡発掘調査。関大との合同調査。第八次調査	
1960年	3月		五ヶ山円墳測量	
1960年	3月		尼崎市立花、すさのお神社の水堂古墳測量	
1960年	3月		五ヶ山道路工事現場緊急調査	
1960年	3月～4月		雲雀ヶ丘ゴルフクラブ調査	
1960年	3月～4月		奈良市古市の四天王寺式寺院址発掘調査	

1960年	3月～5月		伊丹市伊丹庵寺発掘調査	
1960年	5月		加茂遺跡表面採集時の整理	
1960年	5月		万籣山古墳遺物の整理	
1960年	5月		宝塚「日本歴史博」陶棺出品	
1960年	5月		家島 大山神社弥生遺跡 A 地区復原、出土品整理。	
1960年	6月		関学構内古墳奥壁実測	
1960年	6月	神戸市垂水区舞子浜 遺跡発掘調査	舞子遺跡発掘調査	「祖先のあしあと」IV p.71-73
1960年	5月～6月	宝塚市切畑長尾山古墳群発掘調査		
1960年	7月		上の島遺跡発掘調査	
1960年	7月～8月・12月		伊丹市伊丹庵寺発掘調査	
1960年	7月	神戸市垂水区 五色塚古墳		「祖先のあしあと」IV p.142
1960年	8月		五色塚古墳測量	
1960年	8月		会下山遺跡発掘調査・住居復原	
1960年	9月		玉手山古墳（鏡割塚・■切古墳）発掘調査	
1960年	10月		舞子浜埴輪円筒棺復元	
1960年	11月		文化祭展示（舞子浜円筒棺等）	
1960年	10月～11月		玉手山住居跡発掘	
1961年	1月		窯跡発掘調査（場所不明）	
1961年	2月～3月		小野市船木古墳群（四人山古墳群）調査	
1961年	5月		関西学院大学考古学研究会 同好会から関西学院大学考古学研究会に改名	
1961年	6月		尼崎市若崎地区（名神高速道路）調査	
1961年	9月	西宮市仁川町六丁目五ヶ山古墳群発掘調査		
1962年	7月～8月	宝塚市切畑長尾山雲雀ヶ丘古墳群発掘調査		
1965年	7月～8月	西宮市苦楽園五番町 苦楽園古墳発掘調査		

1967年	3月	西宮市山口町山口青石古墳発掘調査		『青石古墳発掘調査報告』西宮市教育委員会、1974.4 文化財資料、No.8号
1967年	6月		加古川バイパス発掘	
1967年	7月～8月	川西市加茂遺跡発掘調査		
1967年	11月		文学部祭展示	
1968年	8月	尼崎市水堂大井戸古墳発掘調査		
1968年	11月		文学部祭展示	
1968年	12月		京都学生会議参加	
1968年	12月		西宮市北部山口地区分布調査	
1969年	1月		宝塚市南部分布調査	
1969年	7月		五ヶ山・旭ヶ丘分布調査	
1969年	7月～8月	川西市加茂遺跡（鶴神社境内）発掘調査		
1969年	11月	川西市加茂遺跡（鶴神社北側）発掘調査		
1970年	7月	宝塚市旧清遺跡発掘調査		
1970年	7月	川西市加茂遺跡（幼稚園敷地）発掘調査		
1970年	10月	宝塚市五ヶ山遺跡（第4地点）発掘調査		『仁川五ヶ山弥生遺跡：No.4地点の調査報告』西宮市教育委員会文化課、1975.3 西宮市文化財資料、第14号
1970年	10月	川西市加茂遺跡（第3号線地点）発掘調査		
1970年	11月	西宮市甲山山頂銅劍出土地点調査		
1970年	11月～12月	川西市加茂遺跡（市道11号線）発掘調査		
1971年	7～8月		和歌山県すさみ町上ミ山古墳発掘調査	すさみ町教委 1972『上ミ山古墳緊急調査概報』
1971年	8月	勝福寺南墳発掘調査		
1971年	10月～12月	尼崎市武庫庄遺跡（第2次）発掘調査	尼崎市武庫庄遺跡発掘調査	
1971年	10月			
1971年	12～1月		西宮市内分布調査	西宮市教委 1972『西宮市埋蔵文化財遺跡分布図及び地名表』。※西宮市遺跡分布図作成のためのもので、1968・1970年度も関学考古研参加で実施
1972年	1月	宝塚市堂坂遺跡発掘調査	宝塚市堂坂遺跡発掘調査	宝塚市教委 1971『堂坂遺跡発掘調査報告書』

1972年	3月	宝塚市仁川旭ヶ丘古墳群(2号墳)発掘調査	宝塚市旭ヶ丘古墳群2号墳発掘調査	仁川旭ヶ丘古墳群調査委員会 1972『仁川旭ヶ丘古墳群調査報告』
1972年	3月		宝塚市五ヶ山古墳群4号墳実測調査	1976『関西学院考古』3
1972年	4月～5月	尼崎市中ノ田遺跡(第2次)発掘調査	尼崎市中ノ田遺跡第2次発掘調査	
1972年	8月		宝塚市普明寺宝篋印塔発掘調査	
1972年	7月～8月	宝塚市雲雀山東尾根古墳群A支群(2～8号墳、9～15号墳)B支群(1・2号墳、37号墳)発掘調査	宝塚市雲雀山古墳群発掘調査	宝塚市教委 1975『宝塚市雲雀山古墳群・東尾根A支群・西尾根B支群の調査』
1972年	10月～11月	尼崎市武庫庄遺跡(第3次)発掘調査	尼崎市武庫庄遺跡発掘調査	
1972年	11月	宝塚市安倉地区土地区画整理事業に伴う発掘調査	宝塚市安倉地区試掘調査	宝塚市教委 1973『安倉地区埋蔵文化財試掘調査報告書』
1973年	3月		『関西学院考古』1号発行	
1973年	4～5月		宝塚市平井・雲雀山西尾根古墳群分布調査	※雲雀山古墳群発掘調査報告書作成のため
1973年	5月		尼崎市下坂部遺跡第4次試掘調査	尼崎市教委 1981『尼崎市下坂部遺跡 第4次調査報告』
1973年	8月		西宮市五ヶ山古墳群3号墳実測調査	1976『関西学院考古』3
1973年	8月	西宮市五ヶ山(No.6地点)遺跡発掘調査	西宮市五ヶ山遺跡No.6地点発掘調査	
1973年	9月	宝塚市万籜山古墳遺物実測調査		
1973年	11月	尼崎市下坂部遺跡発掘調査	尼崎市下坂部遺跡第4次発掘調査	尼崎市教委 1981『尼崎市下坂部遺跡 第4次調査報告』
1974年	2月～3月	川西市加茂遺跡(第1次)発掘調査 ★加茂遺跡1次調査?該当調査不明		
1974年	3月	西宮市五ヶ山(No.5地点)遺跡発掘調査	西宮市五ヶ山遺跡No.5地点発掘調査	『仁川五ヶ山弥生遺跡: No.5地点の調査記録』西宮市教育委員会文化課, 1976.3 西宮市文化財資料, 第16号
1974年	3月～4月	西宮市苦楽園五番町古墳群(5・7・8号墳)発掘調査		
1974年	6月		宝塚市平井・雲雀山西尾根古墳群分布調査	※雲雀山古墳群発掘調査報告書作成のため

1974年	7~8月		姫路市長越遺跡発掘調査	兵庫県教委 1978『播磨・長越遺跡－昭和49・50年度調査報告書－』
1974年	6月	宝塚市伝万籟山古墳 遺物実測調査		
1974年	7月～8月	尼崎市東園田遺跡（第2次）発掘調査	尼崎市東園田遺跡第2次発掘調査	尼崎市教委 1980『尼崎市東園田遺跡 第1次・第2次調査報告』
1974年	8月	西宮市高座町貝足塚 古墳発掘調査		『貝足塚発掘調査概報』西宮市教育委員会文化課、1975.3 文化財資料、第11号
1974年	8月	宝塚市雲雀山東尾根 古墳群C支群（2号墳） 発掘調査	宝塚市雲雀山東尾根古墳群C2号墳発掘調査（第1次）	『長尾山の古墳群調査集報：雲雀山東尾根古墳群C支群2号墳：雲雀丘古墳群B支群1号墳：中筋山手古墳群5号墳』宝塚市教育委員会、1980.3 宝塚市文化財調査報告、第14集
1974年	10月		宝塚市万籟山古墳石室実測 調査	宝塚市教委 1975『揖津万籟山古墳』
1974年	10月	宝塚市安倉高塚古墳 墳丘実測調査	宝塚市安倉高塚古墳墳丘実測調査	
1974年	11～12月	宝塚市雲雀山東尾根 古墳群C支群（2号墳） 発掘調査	宝塚市雲雀山東尾根古墳群C2号墳発掘調査（第2次）	宝塚市教委 1980『長尾山の古墳群調査集報』
1974年	11月		関西学院構内古墳実測調査	1975『関西学院考古』2 1976『関西学院考古』3
1975年	1月	宝塚市中山出土銅鐸 実測調査		
1975年	6月		『関西学院考古』2号発行	
1975年	7～8月		滋賀県野洲町灰塚古墓発掘 調査	元興寺仏教民俗資料研究所考古学研究室 1975『灰塚古墓発掘調査概要』『古代研究』7
1975年	8月	西宮市苦楽園五番町 古墳群（7・8号墳） 発掘調査		
1975年	10月		中筋山手4号墳測量調査	
1975年	12月		雲雀ヶ丘古墳C支群北一 号墳測量調査	
1976年	1月		『関西学院考古'75』発行	
1976年	3月		宝塚市長尾山分布調査	
1976年	3月		『山本庚古墳群分布調査報 告書』発行	
1976年	10月		『関西学院考古』3号発行	
1976年	10月	宝塚市中筋山手東古 墳群（2号墳）発掘調 査		

1976年	11月		中筋山手古墳群踏査	
1977年	5月		中筋山手古墳7号墳測量調査	
1977年	6月		中筋山手古墳1号墳測量調査	
1977年	7月		中筋山手古墳4号墳測量調査	
1977年	8月	西宮市神園町神園古墳群(3号墳)発掘調査		
1978年	1月		『関西学院考古'77』発行	
1978年	2月		『関西学院考古』4号発行	
1978年	2月	宝塚市仁川高台遺跡発掘調査		
1978年	5月		雲雀丘C支群測量調査	
1978年	6月	宝塚市雲雀山古墳群B支群(1号墳)発掘調査		「長尾山の古墳群調査集報：雲雀山東尾根古墳群C支群2号墳：雲雀丘古墳群B支群1号墳：中筋山手古墳群5号墳」宝塚市教育委員会、1980.3。宝塚市文化財調査報告、第14集
1978年	11月		滋賀県鴨禿荷古墳測量調査	「高島郡高島町鴨禿荷山古墳現状実測調査報告」「滋賀文化財だより」22、1979.4
1978年	12月	宝塚市中筋山手古墳群(5号墳)発掘調査		
1979年	3月		『関西学院考古』5号発行	
1979年	3月	尼崎市中ノ田遺跡(第3次)発掘調査	尼崎市中ノ田遺跡発掘調査 山本奥古墳群分布調査	
1979年	4月		川西市栄根遺跡第2次発掘調査	
1979年	5月		雲雀山西尾根古墳群B支群分布調査	
1979年	6月		西宮市西宮神社社頭遺跡発掘調査	
1979年	7月		滋賀県東浅井郡浅井町北野遺跡発掘調査	
1979年	9月	西宮市仁川町五ヶ山遺跡(第3地点)発掘調査		
1979年	12月	尼崎市中ノ田遺跡(第4次)発掘調査		
1980年	1月		『関学考古'79活動編』発行	
1980年	7月～8月	尼崎市中ノ田遺跡(第5次)発掘調査	尼崎市中ノ田遺跡発掘調査	

1980年	3月		『関学考古6号』発行	
1980年	9月		池の沢庭園遺跡発掘調査	『池の沢庭園遺跡発掘調査概要』 1981（朽木村教育委員会）
1981年	11月		『関西学院考古』7号発行	
1982年	5月	宝塚市域遺跡詳細分布調査		
1982年	7月～8月	尼崎市中ノ田遺跡（第6次）発掘調査		
1982年	10月		滋賀県高島郡高島町押戸古墳群第3支群第10号墳現状実測調査	
1983年	3月	宝塚市中山莊園古墳（第1次）発掘調査		
1984年			滋賀県大津市延暦寺発掘調査	
1984年	7月		滋賀県東浅井郡湖北町延勝寺湖底遺跡発掘調査	『延勝寺湖底遺跡発掘調査報告書』1985（滋賀県教育委員会／財団法人滋賀県文化財保護協会）
1984年	7月		滋賀県東浅井郡湖北町尾上遺跡発掘調査	『尾上遺跡発掘調査報告書』1985（滋賀県教育委員会／財団法人滋賀県文化財保護協会）
1984年	9月		宝塚市仁川高台遺跡試掘確認調査	
1984年	9月～11月	尼崎市園田遺跡（第3次）発掘調査		
1984年	10月		雲雀山西尾根古墳群B支群測量調査	
1984年	10月	宝塚市満願寺遺跡発掘調査	雲雀山西尾根古墳群B支群測量	
1984年	11月	宝塚市中山莊園古墳（第2次）発掘調査		
1985年	3月		『関学考古'84活動編』発行	
1985年	4月		雲雀山西尾根古墳群B支群測量調査	
1985年	7月		雲雀山西尾根古墳群B支群11号墳測量調査	
1985年	7月		滋賀県草津市烏丸崎遺跡発掘調査	『烏丸崎遺跡・津田江湖底遺跡』2008（滋賀県教育委員会／財団法人滋賀県文化財保護協会）
1985年	7月	尼崎市武庫庄遺跡（第4次）発掘調査		

1985年	10月		雲雀山西尾根古墳群B支群測量 川西市栄根遺跡発掘調査	
1986年	1月		川西市山下城域文化財分布調査	
1986年	3月	尼崎市中ノ田遺跡（第10次）発掘調査	『関学考古'85活動編』発行	
1986年	4月		川西市加茂遺跡第81次・第82次発掘調査	『川西市加茂遺跡 第81～83・85～91次発掘調査報告』1988（川西市教育委員会）
1986年	5月		川西市栄根遺跡第19次発掘調査	『川西市栄根遺跡 第19次発掘調査報告』1989（川西市遺跡調査会／川西市教育委員会）
1986年	5月		川西市加茂遺跡第83次発掘調査	『川西市加茂遺跡 第81～83・85～91次発掘調査報告』1988（川西市教育委員会）
1986年	7月		滋賀県甲賀郡水口町波濤ヶ平古墳群測量調査	『波濤ヶ平古墳群』1988（水口町立歴史民俗資料館）水口町文化財調査報告書第4集
1986年	9月	宝塚市五ヶ山古墳群（3号墳）範囲確認調査		
1986年	11月	宝塚市西谷地域ほ場整備に伴う遺跡確認調査（第1次）	学部祭展示「長尾山の古墳群の調査とその成果」	
1986年	12月		宝塚市波豆分布調査	
1987年	1月		中山寺周辺分布調査	
1987年	3月		『関西学院考古』8号発行 『関学考古'86活動編』発行	
1987年	4月		長尾山分布調査 川西市西畠野確認調査	
1987年	7月		川西市栄根遺跡発掘調査	
1987年			川西市加茂遺跡発掘調査	『川西市加茂遺跡 第81～83・85～91次発掘調査報告』1988（川西市教育委員会）
1987年			川西市小戸遺跡発掘調査	
1987年	9月		滋賀県犬上郡甲良町金山神社石造品調査	『金山神社境内未完成石塔群の調査』1897（金屋石造品調査団）
1987年	11月	宝塚市西谷地域ほ場整備に伴う遺跡確認調査（第2次）		

1988年	3月		宝塚市雲雀山西尾根古墳群 B支群発掘調査	『雲雀山西尾根古墳群発掘調査 報告書：B支群の調査』宝塚市 教育委員会、1991.3（宝塚市文 化財調査報告、第26集）
1988年	3月		『関学考古'87活動編』発 行	
1988年	8月	宝塚市山本奥古墳群 C支群発掘調査	川西市小戸遺跡 第6次発掘調査 滋賀県高島郡高島町白鬚神 社古墳群測量調査	
1989年	3月		宝塚市西谷地区分布調査	
1989年	3月		『関学考古'88活動編』発 行	
1989年	5月		天満神社古墳測量	
1989年	10月～ 11月		山本踏査	
1991年	4月～5 月		滋賀県高島郡高島町坪戸古 墳群実測調査	
1991年	4月		川西市加茂遺跡109次発掘 調査	
1991年	5月		宝塚市雲雀山古墳群分布調 査	
1991年	6月		川西市栄根遺跡25次発掘 調査	
1991年	8月		川西市勝福寺古墳試掘調査	
1991年	10月		『関西学院考古』9号発行	
1991年	10月～ 12月		川西市加茂遺跡114次発掘 調査	
1992年	1月～3 月		川西市加茂遺跡120次発掘 調査	
1992年	3月		滋賀県高島郡高島町坪戸古 墳群実測調査	
1993年	10月	宝塚市山本奥古墳群B 支群発掘調査		
1993年	12月	宝塚市雲雀山西尾根 古墳群B支群(3号墳) 発掘調査		
2003年	2月～		甲山刻印群E地区踏査開始	
2003年	4月		非公認団体から文化總部へ 昇格	
2003年	11月		新月祭企画展示	
2003年	12月		関西学生考古学研究会発 足、参加	
2004年	3月		同窓会開催	
2007年	3月		『関西学院考古』10号発行	

2016年	1月		西宮市・姫路市へ考古研所 蔵遺物の移管	2022『関西学院考古』11
2016年	2月		神戸市・宝塚市・川西市に 遺物移管	2022『関西学院考古』11
2016年	6月		部室移転（文学部棟地下か ら学生会館へ）	2022『関西学院考古』11
2019年	5月		遺物整理開始	2022『関西学院考古』11
2019年	8月		西宮市に遺物移管2回目	2022『関西学院考古』11
2021年	12月		川西市資料館にて目録作 成・写真撮影	2022『関西学院考古』11
2021年	12月		西宮市立郷土資料館にて目 録作成・写真撮影	2022『関西学院考古』11
2022年	1月		宝塚市立小浜宿資料館にて 資料整理・目録作成・写真 撮影	2022『関西学院考古』11
2022年	1月		神戸市埋蔵文化財センター にて目録作成・写真撮影	2022『関西学院考古』11
2022年	12月		『関西学院考古』11号発行	2022『関西学院考古』11

# 関西学院構内古墳の3次元計測調査

高田祐一

## 1. 調査に至る経緯

上ヶ原キャンパスが位置する上ヶ原台地には、古墳時代後期の古墳群が残されており、そのうち関西学院大学敷地内に位置する関西学院構内古墳（以降、構内古墳）は遺存状況が良いものである。関西学院大学の教員であった武藤誠先生および関西学院大学考古学研究会（以降、考古研）が伝統的に調査を実施してきた。構内古墳からは、金環などの装飾品、馬具、人骨などが出土しており、西宮市史跡に指定されている。「学びと探求の共同体」を使命として標榜している関西学院大学においては、文化財を媒介に学びと探求を実践できる貴重なフィールドともいえる。今後、大学が構内古墳を未来に継承していくためにも、管理のためのモニタリングが必要である。前回の計測から約半世紀が経過しており、現状の構造を立体的に取得し、記録する必要がある。また考古研としての学術活動や、現在の計測機器の検証も兼ねて、3次元計測を実施した。

## 2. 関西学院構内古墳の調査の経緯

### 2.1 構内古墳については、下記の既往調査がある。

1935年：武藤誠教授を中心に調査

1959年：関西学院大学考古学研究会（顧問である武藤誠教授の指導）が発掘調査

1960年：関西学院大学考古学研究会が構内古墳奥壁を実測

1974年：関西学院大学考古学研究会が構内古墳を実測

### 2.2 既往の調査成果に関する文献

『甲陵』1935年11月。『西宮市史』1・7巻、1959年。『関西学院考古』2号、1975年。

『関西学院考古』3号、1976年。

## 3. 調査体制と方法

### 3.1 調査日時

2022年2月15日10時から16時

### 3.2 調査体制

【調査主体】関西学院大学考古学研究会：福田紗己、西村彩良、金岡希世乃（OB）

【技術支援】奈良文化財研究所：高田祐一、野口淳 ※科研調査の一環

【オブザーバ】坂井秀弥

【オブザーバ】西宮市：山田暁、藤原亮太

### 3.3 調査方法

構内古墳の墳丘および石室を以下の方法で、3次元として記録した。

3次元計測：sfm-MVSによる写真三次元計測

LiDAR三次元計測

## 位置測量：RTK-GNSSによる測量

使用機材：

LiDAR三次元計測：iPad Pro(第3世代)。ソフトはMetascan

RTK-GNSS：RWP(DG-PRO1RWS)。Dropper-GPS。ALES(位置補正情報配信サービス)

### 4. 調査成果

調査成果として次の図面を作成した。

図1 墳丘全体のオルソ画像(sfm-MVS、等高線)

図2 墳丘と石室の断面図(sfm-MVS)

図3 石室4面展開図(sfm-MVS)

図4 石室4面展開図(LiDAR)

図5 [参考]1970年調査時の石室展開図

### まとめ

LiDAR計測は、iPadのみで墳丘を20分程度、石室を10分程度で記録した。当日、初めて操作する学生が10分程度のレクで使用できる簡便さである。さらに精度もいわゆる手測り計測よりも精度が高く、アウトプットはデジタルデータであるため、再利用性が高く各種分析も容易である。今後、記録のツールとして普及が見込まれるものである。1974年の調査では石室班9名、墳丘班5名が5日間にわたって測量した。それに比べると、劇的な効率化である。しかし、言うまでもなく、現地調査ではいかに観察し、知見を得られるかが重要である。iPad LiDARを活用することで、今後は、手際よく文化財を記録し、たっぷりと観察の時間を確保していくことが可能となる。LiDAR関係の機材についても、より高性能化・低廉化が進むと思われる。積極的にデジタル技術に対応していくことで、そのメリットを享受し、浮いた時間／コストをさらに再投資し、改善していくサイクルが重要となる。

なお、本研究の一部は、科学研究費補助金(21K18408、代表：高田祐一)の助成を受けたものである。調査とデータ処理では、野口淳に協力を得た。

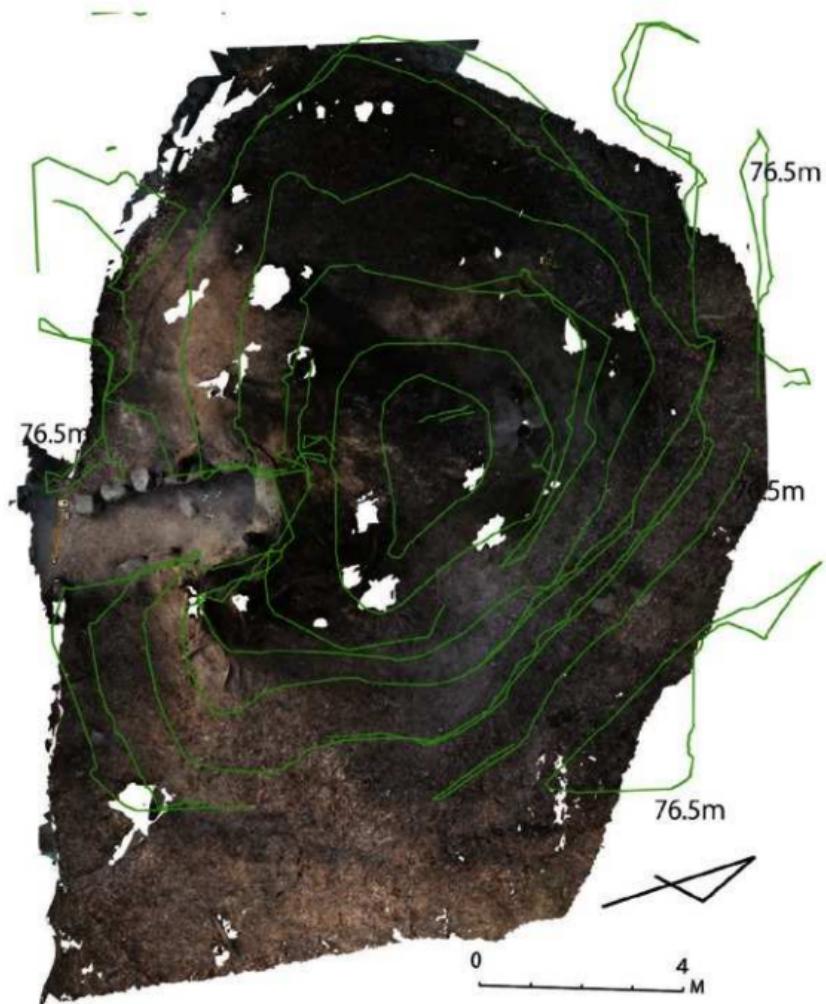


図1 墳丘全体のオルソ画像（sfm-MVS、等高線）

図2 塚丘と石室の断面図 (sfm-MVS)



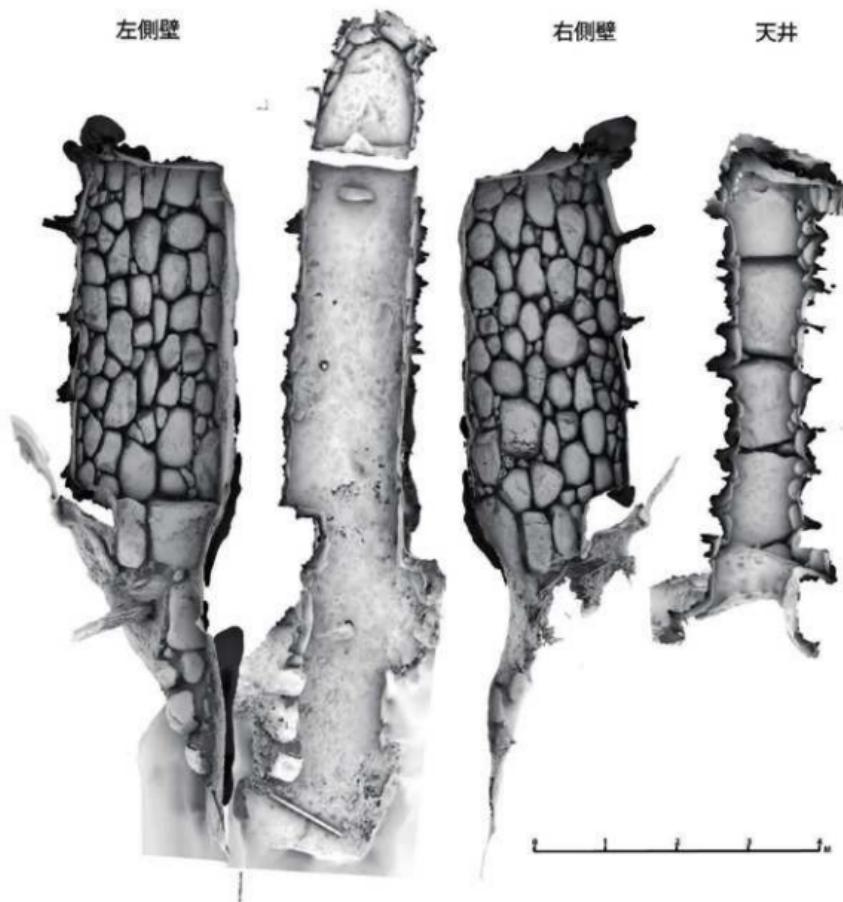


図3 石室4面展開図 (sfm-MVS)

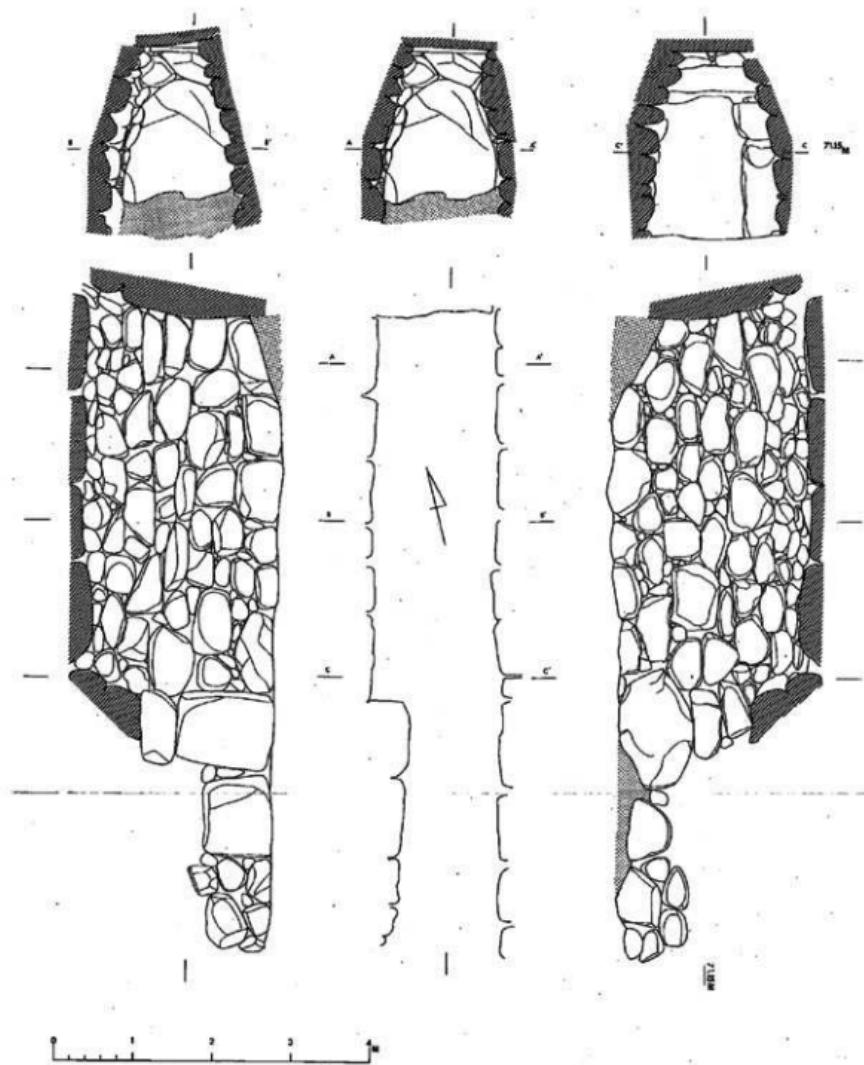


図 4-1970 年調査時の石室展開図

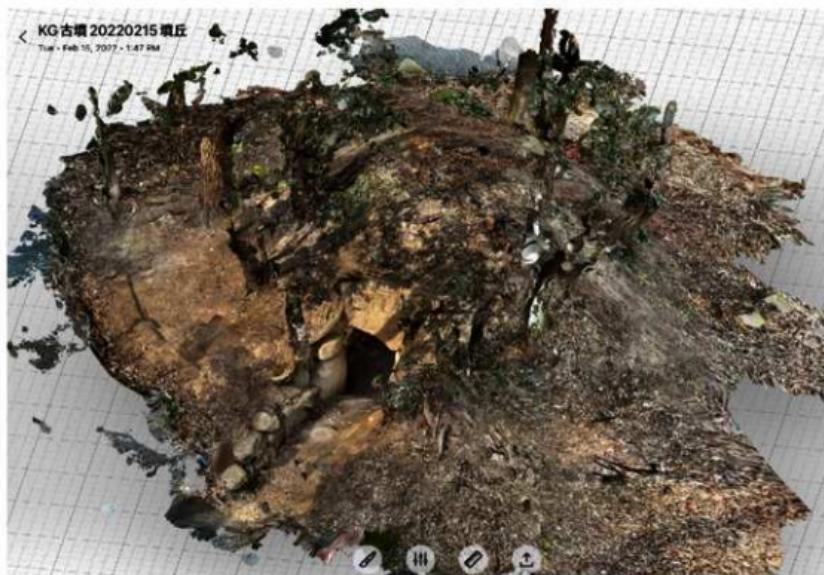


図5 墳丘俯瞰図（LiDAR）



図6 石室俯瞰図

# 『関西学院考古』が私にある

坂井秀弥

## 1

2013（平成25）年から毎年2月に3日間、上ヶ原の関学に通っている。大学院の集中講義「日本考古学特殊講義」のためである。大学の正門を入ると、正面に中央芝生と時計台、その背後の甲山。関学を象徴する風景だ。甲山を基軸としたキャンパスの景観設計がいまもきちんと保持されており、卒業生としてうれしい。自然と40年以上前の学生時代がよみがえる。正門から中央芝生を右手に進み文学部棟に着くと、正面入り口手前の下り階段からに入る。突き当たり右側に暗くて重苦しい扉がある。昔のままだ。私が6年間通った関学考古学研究会、私たちは「考研」とよんでいた、その部室である。そこは2016年、事情があって学生会館に引っ越した。

私は、専門はと問われれば、職業がら考古学と答える。しかし、気持ちは複雑である。大学・大学院のゼミは古代史の福島・亀田両先生であり、考古学を専攻していないからだ。関学で考古学を教えておられた武藤誠先生は、私が3回生進級時に退職され、考古学の先生はいなくなっていた。だから、私は考古学をもっぱら考研で学んだ。考研に入っていなければ、新潟県や文化庁で埋蔵文化財の仕事をすることも、大学で考古学を教えることもなかった。そして、考研に入っていたとしても、『関西学院考古』をつくってなければ、いまの自分はないと思うのである。

## 2

私が関学に入学したのは1974年（昭和49）である。新潟市出身の私は、二つ上の兄が新潟の縄文を代表する「火焔土器」の本を読んでいて、考古学に多少の興味はあったものの、強いこだわりはなかった。むしろ高校2年のとき修学旅行で飛鳥を訪れて感動したこともあり、古代史や寺院・仏像などに关心があった。それでもなぜか考研の扉に吸い込まれた。

部室には窓もなく暗くてじめじめしていたが、棚には土器などが置かれていて、不思議と落ち着く空間だった。当時の考研は、文学部4回生の岡野慶隆さん（川西市教委OB）、法學部3回生で会長の北山勇さんを筆頭に10名ほどの会員がいた。文学部以外の学生も多く、考古学を専攻するものは少なかった。入部当初、週一回の勉強会で小林行雄著『日本考古学概説』の輪読や、土器・平板の実測練習などをおこなった。考古学はロマンだと思い込んでいたが、実測をやってみるとそうではなかった。

1回生の夏休みに初めて現場に出た。まずは尼崎市東園田遺跡、その後宝塚市雲雀ヶ丘の古墳に移った。いずれも2・3週間ほどであったと思う。現場は暑くて慣れない作業だった。それでも、考古学というものを実感し面白さを感じた。それには岡野さんのほか関学OBの橋爪康至さん（尼崎市）、岡田務さん（同）、元興寺文化財研究所の兼康保明さんなど、自らの手本となる先輩たちとの出会いが大きかった。2回生になると、考研の3回生に文学部の学生がいないからと、会長を務めることとなった。

その年の夏は、滋賀県野洲市の兼康さんの現場で、公民館に合宿しながら過ごした。その当時土葬であった墓地の一角で、なじみのない中世墓を掘った。怖がりの私には全身の漆かぶれも重なってつらかった。しかし、現場が終わったときの達成感は格別であつ

た。このとき考古学を職業にしようとの思いがわいた。

### 3

私にとって大きな転機となった野洲の現場に出る前、ガリ版刷りの『関西学院考古』第2号（1975年）を刊行した。内容は関学構内古墳の遺構・遺物の報告である。その実測は先輩たちの手によるものも多い。図版と原稿を作成できたのは、大学院に進学した岡野さんや前会長の北山さんのおかげである。これが創刊号でないのは、私の入学前にすでに『関学考古』というガリ版刷りの小冊子が創刊号として出ていたからだ。その創刊号は研究会の活動記録であり、学術的な調査報告ではない。タイトルも「関西学院考古」に改めたこともあり、これを創刊号とすべきであったかもしれないとも思う。でも当時こだわりはなかった。

第2号の刊行はまことにささやかな成果ではあったが、私には考古学の世界に入ることができた実感があった。この第2号を出したとき、関学考研がやるべきことが見えてきたように思う。当時、各地の発掘現場で学生がアルバイトで補助員をやることは一般的だった。私たちもそうであった。しかし、それでは単なるアルバイト要員の集まりにすぎない。大学の考古学研究会としての存在意義が問われるよう思えた。他の大学で考古学研究会の名前を聞くこと也有ったが、研究会が独自に調査活動をおこなって会誌を出すことはほとんどなかった。

考研が主体となった発掘調査はできないが、西宮市や宝塚市など大学周辺にある後期の群集墳であれば、学生だけでも墳丘と石室の測量調査が可能だ。その報告を研究会誌に発表すれば、学術的な基礎資料となる。大いに意義ある研究会活動といえる。考古学の鍛錬にもつながる。岡田さんや岡野さんの助言も得ながら、このような考えになった。考古学の先生がいない関学で考古学を志すためでもあったと思う。

翌1976年に出了した第3号は、2号の内容を発展させて仁川流域の後期古墳をテーマに、岡田さん・岡野さん共著（「双岡」の筆名）の考察も加えて、本格的な印刷物とした。もちろん岡田さん、岡野さんなどOBの方々の絶大な助力によるものである（写真1）。この後の第4号以降は、宝塚市長尾山の古墳群についての調査報告を柱にして、1980年3月の私の大学院修了時に、第6号が刊行された。私は大学院1年のときの第5号までは長尾山の古墳群の報告にかかわった。

『関西学院考古』に成果を掲載するために週末には長尾山に通い、墳丘の1/100平板実測と横穴式石室の1/20割付実測を続けた（写真2）。かつてロマンを感じなかった実測ではあったが、その過程で遺跡を自らが観察し、考古学の学術資料を作成する作業に大きなよろこびを感じることができた。報告作成の途上で、古墳の時期・立地と石室の形態・規模などの変遷なども見えてくる。それを若干まとめて書いた。考古学の研究をしているという充足感が得られた。

### 4

1980年、新潟県に就職した際、考古学専攻でなくとも、ささやかながら『関西学院考古』の業績があったことは誇らしかった。新潟県でいくつかの発掘現場を担当し報告書をつくり、その過程で見出した興味を広げて論文を書くようになった。『関西学院考古』での経験の延長だった。こうして考古学で仕事ができるようになったのは、学生時代の現

場経験にもよるけれど、考研で自ら調査しその報告を『関西学院考古』として作成したことがじつに大きい。あらためて関学考研とその成果である『関西学院考古』は大きな財産だと思うのである。

私が関学考研を離れてから40年以上の歳月がたった。考古学の教員もおらず、考古学を専攻する学生もほとんどいない大学で、よくここまで継続したものだと思う。この間多くの学生がこの研究会をつないできたことに大きな感慨を覚える。数年前、部室の引っ越しを契機に所蔵資料の移管問題が生じ、その後も残された履歴不明資料の取扱いが課題になるなか、考古学専攻ではない学生たちが懸命に作業に取り組み、そして、ここに『関西学院考古』第11号を刊行することになった。満腔の敬意を表したい。

関学考研を支えてきた学生の大半は、私のように考古学を職業にしているわけではない。それでも、学生諸君にとって、考研と『関西学院考古』は、私と同じように人生においてかけがえのない財産になると思う。多くの学生のなかで考古学に興味ある者が集まり、共同できまざまな活動をおこなう。だからこそできることが大きく広がり、個人ではなしえない成果が得られる。誰しも人生の岐路にある時期だけに悩みは大きいが、それを越えるものがあるにちがいない。私にとって、文学部地下にあったあの部室は、大学での大事な「居場所」であった。部室が学生会館に変わった今後も、その居場所が長く引き継がれることを願ってやまない。

最後に、このたびの資料移管と今号刊行まで、労苦をいとわず多くの指導・支援にあられたOBの岡野慶隆さん、松林宏典さん、高田祐一さん、藤原光平さん、そして、顧問として見守っていただいている中西康裕先生に、心から御礼を申し上げるものである。また、考研の草創期に主力メンバーとして活躍され、武藤先生のあと顧問として長く指導にあられた、故福島好和先生と、現場や『関西学院考古』作成に多大なご指導をいただいた故岡田務先輩のご靈前に、いまも続く関学考研の活動についてご報告申し上げたい。

(註) 小稿は、坂井秀弥「関学時代の大きな財産「関学考研」」(『KG歴史考古の会10周年記念誌』2019年7月)をもとに大幅に加筆修正した。



写真1  
『関西学院考古』第3号の編集作業（1976年3月、尼崎市立花収蔵庫）

左から岩橋（法3）、坂井（文2）、  
小島（経3）、故岡田先輩（尼崎市）



写真2 『関西学院考古』第4号の古墳撮影（1977年10月、宝塚市中筋山手古墳群1号墳）  
左から今田（商3）、坂井（文4）、衣川（商3）

## 『関学考古』2号～10号の目次

### 第2号

調査にあたって	北山勇
調査日誌抄	畠山恵至
位置と環境	小島周二・坂井秀弥
調査の方法	岩橋信幸・小野登茂子・浜口精
調査結果	小島周二・岩橋信幸
考察とまとめ	北山勇・岩橋信幸
特論	小島周二・北山勇・岡野慶隆
調査参加者雑感	
あとがき	北山勇

### 第3号

はじめに	
位置と環境	
遺跡 a 上ヶ原古墳群 b 五ヶ山古墳群	
考察とまとめ	
おわりに	

### 第4号

長尾山古墳群1	
西宮市甲風園採集の弥生式土器	折井千枝子・坂井秀弥
横穴式石室の平面形について	岡野慶隆

### 第5号

長尾山古墳群2	
西宮市獅子ヶ口の須恵器	
関西学院構内採集の須恵器	
香齋丘学園所蔵の長頸壺	坂井秀弥
猪名県と畿内の県	岡田務

### 第6号

滋賀県東浅井郡浅井町北野遺跡発掘調査概要報告	
長尾山の古墳群3	
宝塚市雲雀丘古墳群C北群4号墳出土の須恵器	直宮憲一
西宮市満池谷墓地内奥彌吉墳について	吉川久雄
五色塚古墳出土の古式土師器とその編年的位置付け	兼康保明
横穴式石室の平面企画について	岡野慶隆

### 第7号

池の沢庭園遺跡発掘調査概要	兼康保明・納谷守幸・木谷秀次
古墳のあるキャンパス	武藤誠
水田址から見た初期の植作技術について	坂井秀弥
書評：黒崎直「近畿における8・9世紀の墳墓」	岡野慶隆

### 第8号

伊和大神と伊和族	福島好和
長尾山の古墳群4	
滋賀県高島郡高島町竹戸古墳群第3支群第10号墳現状調査報告	
中世の花崗岩石切場を訪ねて	兼康保明
横穴式石室の平面企画について2	岡野慶隆
古墳出現期・後期における外来系土器	坂井秀弥
考古研成時記	

### 第9号

滋賀県高島郡高島町白鷺神社古墳群	
高島町白鷺神社所蔵の須恵器	
長尾山の古墳群5	
滋賀県蒲生郡日野町における藏王産花崗岩製中世石造美術の分布	兼康保明
近江における詩物語	白井忠雄
中世後期東海における土鍋の復活と鉄の流通事情	坂井秀弥
畿内における初期横穴式石室の一形式	岡野慶隆

### 第10号

『関西学院考古』創刊の頃	岡野慶隆
神戸市保久良神社境内、銅戈出土の発掘	石野博信
関西学院大学考古学研究会所蔵資料	藤原光平・真田陽平
神川大坂城東六甲採石場甲山剣印群E地区調査報告	
甲山剣印群E地区と肥前鍋島家の関係について	高田祐一・望月悠佑
神川大坂城東六甲採石場甲山剣印群の概要	吉川久雄
明石城公園散策	折井千枝子
関西学院大学考古学研究会の設立と武藤誠「古墳のあるキャンパス」の紹介	福島好和

# 図版





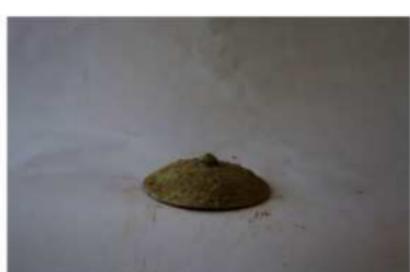


西宮市移管資料 五ヶ山遺跡. 1





西宮市移管資料 五ヶ山遺跡 . 3





西宮市移管資料 五ヶ山遺跡 . 5





西宮市移管資料 五ヶ山遺跡 . 7



西宮市移管資料 五ヶ山遺跡 . 8



西宮市移管資料 その他の遺跡、1

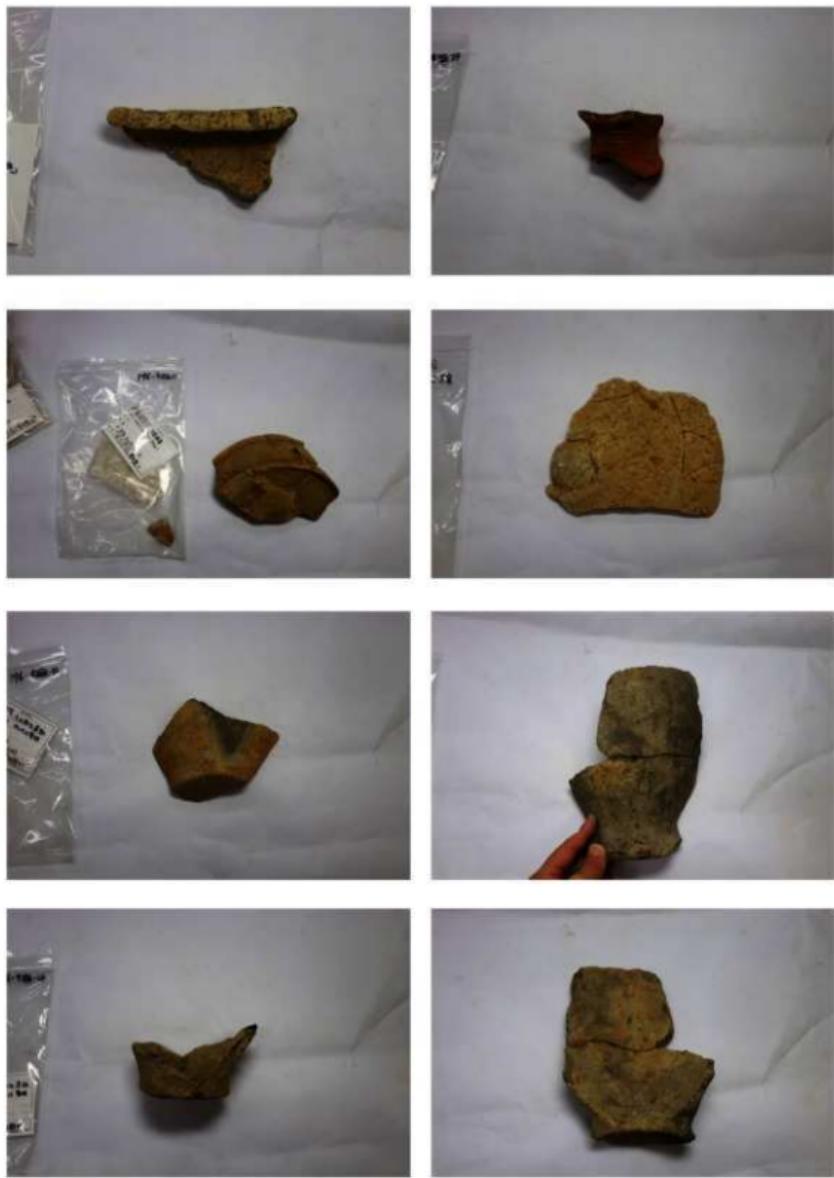


西宮市移管資料 その他の遺跡、2



姫路市移管資料. 1





姫路市移管資料. 3





姫路市移管資料.5





姫路市移管資料. 7





姫路市移管資料. 9





川西市移管資料. 1













宝塚市移管資料. 2



宝塚市移管資料.3



宝塚市移管資料.4





神戸市移管資料.1



神戸市移管資料. 2



# 抄録

ふりがな	かんせいがくいんこうこ					
書名	関西学院考古					
シリーズ番号	第 11 号					
編集機関	関西学院大学考古学研究会					
所在地	〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一一番町 1 番 155 号 旧学生会館内					
発行機関	関西学院大学考古学研究会					
所在地	〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一一番町 1 番 155 号 旧学生会館内					
発行年月日	2022 年 9 月					
所収遺跡名	所在地	市町村コード	北緯	東経	調査期間	発掘原因
関西学院構内古墳	西宮市上ヶ原	28204	34°46'14" 24	135°20'45" 32	2021 年 2 月 15 日	遺物整理
青石古墳	西宮市山口町下	28204	34°50'51" 92	135°14'41" 83		
仁川五ヶ山	西宮市仁川町 6	28204	34°46'33" 18	135°20'32" 28		
	丁目					
甲風園	西宮市甲風園 1	28204	34°44'49" 58	135°21'20" 46		
	丁目					
大山遺跡	姫路市家島町宮	28201	34°40'02" 58	134°34'13" 13		
男鹿						
チンカンドー古墳	姫路市家島町宮	28201	34°40'22" 42	134°32'13" 83		
	字東破風上					
ヒシノタイ古墳	姫路市家島町宮	28201	34°40'15" 43	134°34'09" 86		
男鹿						
真浦遺跡	姫路市家島町家	28201	34°40'51" 92	134°31'51" 05		
	島真浦					
山崎山古墳 1 号墳	姫路市辻井 9 丁	28201	34°51'03" 56	134°40'39" 28	1964 年 8 月 19 日	
	目				↓	
					1964 年 8 月 21 日	
加茂遺跡	川西市加茂 他	28217	34°49'13" 49	135°24'21" 22		
寺畠遺跡	川西市寺畠	28217	34°49'34" 87	135°24'12" 75		
長尾山古墳群	宝塚市平井	28214	34°49'51" 36	135°23'26" 83		
勅使川窪跡	宝塚市中山台 1	28214	34°49'41" 54	135°21'57" 52		
	丁目					
安倉	宝塚市安倉	28214	34°47'47" 94	135°22'25" 34	1972 年 11 月 30 日	遺跡範囲確認
					↓	
					1973 年 3 月 31 日	
舞子浜遺跡	神戸市垂水区東 舞子町	28108	34°37'53" 73	135°02'08" 23		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
関西学院構内古墳	古墳	古墳時代	石室	須恵器、金環、滑石製勾玉、埋木製蠶玉、碧玉製菅玉、水晶製切子玉、ガラス製小玉、鉄鐵、馬具、埋葬遺物	関西学院大学考古学研究会が所蔵している出土遺物を西宮市に移管した。	
青石古墳	古墳	古墳時代後期	横穴石室	須恵器、土師器、鉄釘		
仁川五ヶ山	集落	弥生時代	住居跡	甕形土器、壺形土器		
甲風園	不明	弥生時代前期		壺口縁部、壺口縁部、瓶底部		
大山遺跡	集落	弥生時代	壺棺			
チンカンドー古墳	古墳	古墳時代後期	横穴石室	須恵器、土師器		
ヒシノタイ古墳	古墳	古墳時代後期	横穴石室	土器		
真浦遺跡	集落	古墳時代		師楽式土器、土師器、須恵器		
山崎山古墳 1 号墳	古墳	古墳時代	横穴石室	鉄刀、鉄釘、馬具、首飾り、鏡		
加茂遺跡	集落	弥生時代中期		石器		
寺畠遺跡	集落	弥生時代後期		土器		
長尾山古墳群	古墳	古墳時代後期	古墳群		2 単独墳と 8 支群で構成される。	
勅使川窪跡	窪	古代	窪跡	須恵器、土師片、小型銅鏡		
安倉	古墳	古墳時代	古墳	須恵器、土師器、瓦器		
舞子浜遺跡	墓		埴輪棺	人骨、供養土器		

## 編集後記

☆10号刊行から15年が経ってしまいました。15年に一度の刊行ペースとなりそうです。

★今号は今までの伝統を重んじてB5版で刊行しましたが、次号からは時代の流れに合わせてA4版で刊行する方が良いのかもしれません。

☆冒頭に記述した通り、部室が文学部内から旧学生会館へと移動しました。手狭になりましたが、この引っ越しなければ今号はできなかつたでしょう。

★各自治体の担当の方々にはお忙しい中対応して頂き、本当にありがとうございました。

☆この3年ほどはコロナ禍により思うように活動出来ていませんでした。いち早くコロナ禍が収束することを切に願います。

★この11号は諸先輩方のお力添えなくては実現するものではありませんでした。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

顧問：中西康裕（文学部教授）

2017年入学 金岡希世乃（院進学）

2018年入学 鈴木舞奈（院進学） 西澤知歩（院進学）

2019年入学 福田紗己 林魁星

2020年入学 西村彩良 徳森大晟

2022年入学 横晋之介 植村祐斗 瀧山和樹

※2018年入学以前の部員は大学院進学した者のみ記載

## 関西学院考古 第11号

発刊日 2022年12月31日

編集・発行 関西学院大学文化総部考古学研究会

西宮市上ヶ原1番町1-155 関西学院大学旧学生会館3階

印刷 キンコーズ・ジャパン株式会社

